七師団戦記

あゝ沖縄

（26）

戦没一万八千五百柱の英霊にささぐ

全戦線に弾幕

重砲、地軸をゆるがす

すごい日本砲兵

当時の外電から、米軍では沖縄戦をどう見ていたかーもう少し続けてみよう。

【リスボン四月十日発同盟】九日の米軍前線報道は、一斉に沖縄本島南部の日本軍が、重砲を大規模に使用している点を強調、しかも山岳陣地における日本軍の勇敢な抵抗を指摘して、米軍がこと数日間、一対が二対の戦線を進出しかねない状態にくらい返ねしていたが、激しい攻撃戦は、米第二十四兵団の部隊が、日本軍主力陣地と接触した今日、最高潮に達し、四百対は、おそらく五百ヤードにおよぼう

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン特派員発信のニュース＝沖縄南部の戦闘は、まったく過去なる酷（こく）な戦においちり、日本軍は、太平洋戦域ではじめての大規模な火力を使用、全戦線にわたり恐るべき弾幕をはりめぐらしている。

きょうは、師団司令部が攻撃を受け、付近の大隊陣地に地軸をゆるがすばかりのロケット白（きゆう）砲弾数十発をよくむ六百発近い砲弾が落下した。米軍は、日本の一発に対して十発正面の前線を前進する歩兵一個、という重砲を使用している。

【リスボン十一日発同盟】那覇北方山岳地帯における戦況についてAP特派員は、日本軍重砲火のもとに、しばらく停滞を余儀なくされていた。

米軍第二十四兵団の一個連隊は、十一日早朝、陣地を飛び出し那覇北方の日本軍要塞陣地に殺到したが、たちまち白砲、機銃その他小火器のマトとなり、

ニューヨーク・タイムス特派員発信のニュース＝米第二十四師団の将兵は、太平洋で従来にその比をみない激しい日本軍砲火に、しばしば停止をよぎなくされた。

米軍第二十四兵団の一個連隊は、十一日早朝、陣地を飛び出し那覇北方の日本軍要塞陣地に殺到したが、たちまち白砲、機銃その他小火器のマトとなり、

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙特派員は「敵陣飛行場の東方三キロの日本軍陣地をめぐる血戦は、第三日も勝敗を決しないまま暮れようとしている」と述べ、沖縄本島における日本軍の防御態勢に関し、つぎのとおり伝えている。

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン特派員発信のニュース＝沖縄南部の戦闘は、まったく狂いの砲兵攻撃と同時に日本軍は、おそらく五百ヤードにおよぼうくらい返ねしていたが、激しい攻撃戦は、米第二十四兵団の部隊が、日本軍主力陣地と接触した今日、最高潮に達し、四百対は、おそらく五百ヤードにおよぼうけられている。こうした死に物狂いの砲兵攻撃と同時に日本軍は、おそらく五百ヤードにおよぼう

米軍は、相当長い間、日本軍砲兵陣地に射撃を集中したが、日本軍は、米軍歩兵陣地を猛射し、現在なお激しい砲兵戦が続けられている。こうした死に物狂いの砲兵攻撃と同時に日本軍は、おそらく五百ヤードにおよぼう

第三防御陣地の一部の守備隊をやっと撃退したかと思えば、たちまち日本軍の砲火をあび、一歩も進めなくなってしまう。

米軍は、相当長い間、日本軍砲兵陣地に射撃を集中したが、日本軍は、米軍歩兵陣地を猛射し、現在なお激しい砲兵戦が続けられている。こうした死に物狂いの砲兵攻撃と同時に日本軍は、おそらく五百ヤードにおよぼう

ふたたび丘地帯上にたどりつくことができたと述べた。

（第二十四兵団に従軍するニ

日本軍の退却のあとに残されてあった曲射砲
（米陸軍琉球司令部提供）

すべて六キロ以上の戦線にわたり、すこしの土地でも失いそうになれば、ただちに反撃に出る。その増援部隊は、首里から続々北上し、いまや日本軍は、前線に相当な兵力を集結した模様だ。

牧港と東海岸の和平線とを結ぶ線には、日本軍の一連の陣地がある。欧州戦の体験者は、これを評して巧緻（こうち）かつ精巧なものであると同時に、従来に見たいかなる陣地よりも見事に組織されているといっている。

兵の陣地にたてこもる日本軍は、完全な条件を備えている。

特に近接戦術したらしく、ことに自動火器を豊富に持っている。首里付近の十キロ以内は、五十キロ以内、三百ヤードの間（ゆう）散撃、中小口径砲、対空地・口径砲などが、さまざまに配置され、経験からの教訓に対して、全面的に防御を固めようになっている。

今度の沖縄作戦で、感じ考えるべきことの一つは、日本軍が機銃砲をたくみに、かつ、大規模に使用していることで、その砲火の強しさは、せまい米第七師団陣地に、五分間に二百六十三発という小砲弾が集中された事実によっても知られる。

◇　◇

【四月十日の米軍日記から】

米戦機も無砲も、ほとんどない。至極平静な一日。新鮮な空気と眼鏡にかられゴウを出た。四月の陽光がさん然と輝やき、微風は山間の草原に涼しく、雲はるかに流れ。あちこちに一昨日の爆撃の破片がある。もうかくされている。

キビ畑でキビをかじっているところに中城村の安里英雄者がきた。キビをかじりながら戦況を聞いた。軍が、沖縄出身者から切り込み隊員を募集していると、彼がいう。なんでも、夜中に敵の陣地に手榴弾を投げて帰ればいいとのことだ。

安里君は、そのくらいのことならたいしたことでもないとの自信ありげだ。一、二回陣地を成功するかもしれない、右往左往するのは痛快だろうと、あいつもこっち部隊に加わった。

沖縄戦ごよみ

4月26日

米軍は午前八時から仲間、前田陣地の日本軍陣地に攻撃開始。

4月27日

沖縄決戦の記

泥人形の行進

上陸団戦記

あゝ沖縄

（27）

戦没一万五十八柱の英霊にささぐ

すごい砲弾落下

連日の雨ひざまでぬかる

歩兵第二十二連隊（第二大隊）が、十三日、我如古（がにく）東方高地に進出、戦線を開拓して、敵中に孤立しているのも知らなかった」と振十五回で書いたが、生残者の田中第大隊長（札幌）の手記によつて、ここへくるまでの経過をふりかえつてみる。

第二大隊本隊、青野城村字幸田にあった。四月十日、作戦命令で八十一日未明までに首里北方に進出、第六十二師団石陣地をすてて、見ず知らずの第一線陣地で敵に立ち向かう—別れがたい愛着を感じた。

田中曹長は指揮班長として、すすり、構築した陣地、みんなの血と汗と涙がしみているこの世の最期のふろ、この世の地獄の苦だ。田中、薩州以来、ながいあいだ大隊長として公私とも、無理難題、すいぶん世話をかけたな。いよいよ夜からの戦闘で、天命の尽すところ、別々に死んでゆくぞ。よろしく」

平野少佐は泰然と茶をのんだ。田中曹長は、ひとりぶろを浴び、ヒゲをあたった。

「十五日ぶりで、いい気持ちだ。お前もはいってこい。この世の最期のふろ、この世の地獄の苦だ。田中、薩州以来、ながいあいだ大隊長として公私とも、無理難題、すいぶん世話をかけたな。いよいよ夜からの戦闘で、天命の尽すところ、別々に死んでゆくぞ。よろしく」

平野少佐は泰然と茶をのんだ。田中曹長は、ひとりぶろを浴び、ヒゲをあたった。

佐藤中尉は、とかった店を出した。

「おい、田中、お前死ぬつもりか？」

二人は、薩州でなんどもいっしょに演習にはげんだ仲。それだけに、ここまできて死に別れするのは、いやだ。

—佐藤中尉には、ゆるせない。見果てぬ夢がたくさんある。なんとか命をながらえて、戦後の土を踏むぞ」

堅い決心をこめられていた。それを聞く田中曹長の脳裏には、夕ばえをうけた薩摩、岩山の紫色の山容、遥かかすむ手前連峰がうかんでいた。

午後七時。指揮班長各中隊集結。将校は先行し、田中曹長指揮で行進開始。砲弾落下がすごい。きのうまでは見られなかった凄じさだ。泥人形（とよみぐす）に導する路、庄、砲撃と約十日間にわたる連日の雨で泥沼。兵は、一般兵隊のほかに十*の弾薬語をもったため五十*以上の重量。行動は思うように、ならない。頭上からは、雨（りゅう）散弾のサク裂、落下する砲弾は、泥、岩、破片をふりかける。全員、泥まみれ、泥人形の行進—

—たたえ、スパイだ、と田中曹長は思う。きのうまでは、こ

沖縄島民のなかには、南方から帰ってきた者が、たくさん米軍のスパイとして働いているというわさがあるが、彼らのしたないうちに、この厳しい砲撃。田中曹長は、スパイがうらめしかった。

人員の損耗も少なくするため、各隊の長隊を道路の左右約十間に展開させて前進をつづけた。道路わきの畑や草地は、ひざまでぬかり、行進は難行苦行。

青竹城の南、約一*の地点で道路中隊長川島七男中尉（札幌）の第三中隊と合流した。彼は草原中隊。胸のなかが、豪放な川島中尉は、分厚いくちびるを強くひきしめ、戦れを知らぬエネルギッシュな歩みをつづけていた。

歩兵第二十二連隊が陣とんした金見城村字見城（とよみぐす）に部隊長宮崎繁三郎大佐以下四千七百柱をまつり、北海道と沖縄を結ぶという意味での北海之塔をたてた —横水本社特派員撮影

戦場りから

沖縄で戦つた独立混成第二十二大隊（隊長二五七六隊）第一中隊の第一小隊長だった林義一郎さん、美唄に住まわれるという。と聞いておりますが、戦場の苦しみ、戦争の悲惨さ、二度と繰り返さないよう、と語りたがっている。

訂正 山岸間会長改本国書久保長先生人紹さん（札幌市・月曜）

七師団戦記

あゝ沖縄

（28）

戦没一万八千五百柱の英霊にささぐ

佐中勝田吉

熱く血がかよう

本道出身の野人連隊長

◇田中軍司令官を頂点とする第一大隊の前進つづく—

午後十時ごろ。首里南方二キロの陣地、雨降らぬうちにまかせ大隊がかがやけば、死はさけて通れぬ。

「あすからは、もう陣地の下に住いすることはないなあ。戦友の上じゃ、はださむい。」

「あすの朝、三時までに、首里の縁へつくぞ。」

川島中尉の野太い声。

田中軍司令官と川島中尉は相談して小休止する。部落にはカジュマル（榕樹・ようじゅ）の林があり、長雨もある。田中軍司令官は気軽に雨をかけて出発に入り、イロリでぬれた軍服を乾した。

「あすの朝、三時までに、首里の縁へつくぞ。」

川島中尉の野太い声。

田中軍司令官は、雨降りの中、部落の道を北上する。コースは津嘉山道を北上する。コースは一時間やすみ、中隊ごと人員、本部との連絡をたもち、

歩兵第二十二連隊は、吉田勝中佐の指揮をはなれ、石兵団の指揮下にはいる。

第二大隊副官川口栄治は、大隊本部の位置を、弁ケ岳に選定したという。弁ケ岳は首里の東北にあって、日本軍三十二年の軍隊教育隊の拠点があり、そのうえ、第二大隊が使用するよう、台湾軍（第九師団）司令部から指定した。

「吉田中佐ですか？」

「司令官は、軍刀と図のうえを示した。道路はブランクだ。」

「オー、熱だ。吉田中佐だ」

「連隊長、何の用？」

「何もない。これだけ」

吉田中佐は、軍刀と図のうえを示した。道路はブランクだ。

その時の模様を田中軍司令官は、

「オー、熱だ。吉田中佐だ」

「連隊長、何の用？」

「何もない。これだけ」

吉田中佐は、軍刀と図のうえを示した。道路はブランクだ。

牛島司令官は、第二大隊は、石兵団命令により、陽動のため北上した。

カジュマルの木の下に、歩兵第二十二連隊の本部をかかげていた。そばに吉田連隊長がたち、進撃する第二大隊の通過を見送っていた。

これが第二大隊の長隊と吉田勝中佐の最後の別れだった。

前進する第二大隊の長隊は、

「あすの朝、三時までに、首里の縁へつくぞ。」

小銃弾丸飛行場は、二十二連隊第二大隊の陣地内にあった。

昼夜、敵機の攻撃がある。このため、飛行場にトラックを待機させ、台北から軍需輸送機

「オー、熱だ。吉田中佐だ」

「連隊長、何の用？」

「何もない。これだけ」

吉田中佐は、軍刀と図のうえを示した。道路はブランクだ。

「吉田中佐ですか？」

「司令官は、軍刀と図のうえを示した。道路はブランクだ。」

七師団戦記

あゝ沖縄

（29）

戦没一万八千五百柱の英霊にささぐ

前編では、石兵団と山兵団の三四七四部隊が敵戦中一とのことだが、米軍の、このおびただしい物量と圧力を前にたいし、日本軍は二発ずつしか発砲できない歩兵銃で、一機の友軍機の援護もなく戦っている。友軍機は、いつきてくれるのだろう！。これは、戦う者の心からの叫びであった！山三四八三部隊（軍旗）の第六大隊長はその「手記」で書いている。

この軍部隊の編成と、南州から出撃（沖縄への移動）状況を、細田久雄書長（函館市東雲町一、函館市消防本部消防司令長）の手記からみてみよう。

▽部隊長　中村定二郎大佐▽第一大隊長　大橋正樹少佐（戦死）▽第二中隊長（不明）▽第三中隊長　米屋中尉（札幌）▽第三中隊長　渡辺中尉（森町）▽第二大隊　服部照郎少佐（自決）▽第四中隊長　鈴木茂中尉▽第五中隊　高橋中尉▽第六中隊　小松中尉▽第七中隊　高橋中尉。

約一千五百人の部隊全員中、生存の判明しているのは、沖縄現地徴集兵をふくみ約四十人。このうち、本籍居住者は一名（函館）、本大湊（帯広市東三条西五、刑務所）、橋政敏（帯広市西二南二、木材業）、川上義隆（深川市仲町九、ダンスホール経営）、細田久雄（札幌市豊平区二六五、佐々木正一方）、前田弘（函館市資材町、家具商）、森元雄（函館市松風町、古物商）、跡野太郎（士別農協）、斎藤一郎（砂川）、福甲上等兵（釧路）、細田軍曹（函館）、原忠に、岩田軍曹、若木伍長。以上十二人の消息以外は不明である。

山三四八三部隊

細田手記は「私は、沖縄については、あまり人に語らない。また、肉親にも多く語らない。なぜなら、戦いに敗れたからではない。また、わずかの生存者としての心苦しさからでもない。それは、いかに沖縄の激戦がせい惨であったかを、どのように説明しても、現実を味わった者でなければ理解できないことである」と書いている。

本紙もまた、リバイバルを意図しているのでもなければ、軍隊エレジーを書くのでもない。道民としての貴重な体験、見聞を現実を、ありのままに記録にとどめ、父や母に、妻や子に、死者にかわって、事実を伝える。心から戦死者のメイ福を祈るーとうした心と心の交流をはかることが目的なのだ。毎日、遺族が戦記係を訪れ、涙を流して帰ってゆく。各地から戦死者の写真が送られてきている。真実を知りたい気持ちは、みんな同じなのだ。

山三四八三部隊は、もともと南州国民学校（東安の三三四四部隊）で、昭和十九年七月六日動員下令、十三日完結、移動を開始して美山から下関到着。久留米で約十五日間待機して、門司を出航、八月五日、那覇に上陸、八日に読谷村喜名の農林学校に着いた。陸軍機関と輸送計画に基づいて東風平（こちんだら）国民（こくば）野戦

宮城部落から見上げた八重瀬岳。中腹にごうがあり、玄米を精白するのに用いたピールびんは、火炎放射でアメのようになっていた。
―清水本社特派員撮影

にあたった。

米軍が上陸した四月一日から、積極に出動。中旬以降は一部の輸送計画に基づいて東風平（こちんだら）国民（こくば）野戦倉庫（とちり）地区に集積、物資輸送のほか、陣地構築と防衛に当たっていた。十二月十日、陸軍部隊に配布するため、伊祖出動。

四月十日、野戦弾薬と野戦の食糧の輸送、弾薬の輸送を各戦線に出動。中旬以降は一部の五月下旬、部隊の戦死者が多く、六月以降戦況に鑑みて戦傷者輸送に従事した。

五月上旬は、首里前線に弾薬、食糧の輸送業務を担当し、六月十二日、自動車隊（第二大隊・服部少佐）は、最後の輸送を行なう。十四日、中隊を解散、歩兵部隊として戦闘に参加した。

六月十七日、第二大隊の第四中隊（鈴木中尉）は、山三四七八部隊（第第第二十四連隊）に配属され、その他の五個中隊は部隊直轄となって戦闘をつづけた。

以上が、部隊の行動の概略だが「生存者手記」「細田手記」によって、死の戦線の中に秘められている貴重な現実を解明してゆくことにする。

なお、この部隊の生存者の方は、一人でも多くの遺族に、真実を知らせるために協力をとってほしい。あなた方が、ミソ汁をこちそうになり、防空壕やお茶の接待をうけた東風平村字富盛二七の野原ツネさん（六〇）部隊となる戦死）と長男の栄太郎さん（四七歳で戦死）の思い出を胸に、八重瀬岳のふもとで、一人で暮らしている。配者の訪問を待ち、長男さんが、長男さんがーとなつかしがってもてなしてくれた。

沖縄戦（山）よりの聞

日本軍、総攻撃を決意、決行は五月四日と決定。

4月29日

生存わずか40人

筆舌に尽くせぬ悲惨さ

（写真）山兵団司令部故本間雪久夫顧長柔七人、本間恭子さん（札幌市・月寒）

4.30

七師団戦記

あゝ沖縄（30）

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

後退につぐ後退

切り込み隊一人も帰らず

山三四八一部隊

工兵（山三四八一部隊）で、現役までに、戦記係に選ばれたのは日野定男さん（広島県出身、五十自）と菅野盛さん（三重県出身、三七）の二人だけ。同部隊の兵員数は、約二千人。防衛召集二百五十人、合計二千二百五十人で編成されていたが生存者は二千人といわれている。同部隊の行動経過は次のとおり。

昭和十九年八月五日、部隊に下令、首里市赤田町に転進した。上陸、翌年初、読谷山村一帯に進駐した。のち石嶺、久場崎辺の防衛に従事した。第二中隊は歩兵第二十二連隊（山三四七四部隊）に編成され第二中隊は歩兵第八十九連隊（山三四七六部隊）第三中隊は歩兵第三十二連隊（山三四七五部隊）の配下になった。

十月六日、歩兵団の後方線港にともない、島尻郡豊見城村字大里に転進して、付近の警備についた。

四月二十五日、児玉連隊長以下、首里市赤田町に転進した。

ことで、五月四日の総攻撃を行なったが、戦況は日ましに不利となった。それでも三十五日間、首里戦線で戦闘をつづけ、五月二十九日、第二中隊は高嶺村大里まで後退した。六月十日、米軍が大里まで攻めてきたので、新垣に後退した。六月十二日、児玉連隊長は第三中隊を集め、大里、糸満に向った米軍に山三四八一部隊の切り込みを命じた。

部隊の将兵は一体となって指揮官の切り込みを敢行した。

小神上等兵と五人で共同生活をしながら、負傷兵の治療をしていた。

四月二十五日、児玉連隊長以下、首里市赤田町に転進した。

戦車に体当たりして戦死した。切り込みが成功したあと、児玉連隊長は、新垣の連隊本部で戦車攻撃用爆薬を仕掛けさせて自決した。

衛生伍長だった日野さんは、大里の病院壕で病人や負傷兵の治療に専念していたが、助かった。兵隊は、少し回復すると、つぎつぎに夜間切り込みに出撃してゆき、帰ってこなかった。最後には、高嶺村長、宮部隊の三人に別れ、小神上等兵、戦線を突破することができない。しかたなく引き返して、一人、現地人十二人と共同生活をはじめた。

食料は米軍のものを盗んで生きつづけていた。九月二十三日、宜野湾の野戦病院に収容された。

負傷兵に見つかった。これは捕虜になった表現で、病院壕に収容された。敗戦一周年、沖縄文芸、比嘉、丸山太郎、喜屋武、川満、新垣、石嶺、三浦武雄、川満、新垣、宮城、木村、新垣、水元、浦、外山、与那嶺、新垣、新垣、大城、新垣、

【第二中隊】▽中隊長以下、新垣、茂、新垣、新垣、少尉、喜屋武、新垣、新垣、赤嶺、勝三、中隊長、石嶺、大城、喜屋武、丸山、新垣、新垣、新垣

七師団戦記

あゝ沖縄

（31）

戦没一万八千五百の英霊にささぐ

捨て身の切り込み

与座岳一帯が最期の地

山3477部隊

（山三四七七部隊第二十四師団制旅隊）で、戦記係に勤務のあったのは真柳俱也さん＝茨城市鯉淵町一八五＝一人である。

制旅隊は満州では第三部隊（一説には九三部隊）昭和十九年七月六日動員下令、十三日完結。

七月十六日出発し八月五日、沖縄の南端糸満、金武湾の石川港に上陸した。

二十年四月八日、歩兵第八十九連隊（山三四七六部隊）に配属のうえ、遮断陣地で発動の任務をもって切り込み戦闘を行なった。

五月四日、小波津戦線で発動の任務をもって戦闘し、二百小隊の約半数が戦死した。

五月二十日以降三十日まで、山兵団兵器勤務隊の修理要員をくり入れて特編歩兵一個大隊を編成、大隊長五十嵐正二郎大尉が指揮して、前田戦線を守備した。

七月二十日、釜山着。太鼓の到着を待った。七月〇日、本隊が到着。つぎの日、釜山を出発し下関に上陸した。それから沖縄出発の準備をし、七月三十日、門司港から沖縄に向かって出航。

八月五日、沖縄本島西海岸の渡具知港から渡具知に上陸した（のち、米軍の上陸地点となったところ）

八月九日、渡具知から知手納を通り、中頭郡読谷村村役場小学校に約一カ月間駐とんして、南はコザ付近から北は名護付近までの一帯で気象観測を行なった。

九月上旬、務多東方の山中（読谷山）にはいって陣地構築をはじめた。

十二月中旬、島尻郡新垣に移動、ここに駐とんして陣地構築。二十日ごろ、山兵団各部・隊から、山三四七七部隊（制旅隊）に約百人補充された。

四月一日、南風（米軍上陸）から米戦艦八隻の砲撃をうけ、この日、米軍が知手納方面に上陸したと聞いた。

四月末、北上して百田付近の大名（おおな）で戦闘を開始した。六月上旬、新垣付近に後退した。

六月中旬、与座岳に移動して七月中旬まで戦い、全滅した。与座岳一帯が部隊最期の地である。現在わかっている生残者は

つぎの三人である。

出口勝さん＝札幌市新琴似町五三六番地の二。

小沼広信さん＝上川郡愛別村旭山。

佐々木博さん＝中川郡西足寄村字茂村。

（編成）

▽部隊長＝五十嵐正二郎大尉（山形）▽小隊長＝黒田留五郎中尉（札幌市白石出身、戦記十回目の山三四七四部隊編成にある第二大隊第七中隊長黒田中尉）▽部隊長＝五十嵐正二郎大尉（黒松内）西村博伍長（北見）西沼勝司伍長（函館市西川町十三の八）安藤伍長（北見）▽小隊長＝黒田留五郎中尉（札幌市白石出身、戦記十回目の山三四七四部隊編成にある第二大隊第七中隊長黒田中尉）▽部隊長＝五十嵐正二郎大尉（山形

七師団戦記

あゝ沖縄

（32）

戦没二万八十五柱の英霊にささぐ

真柳手記

【真柳手記つづき】

真柳俱也さんが戦死後に送ってくれた山三四七七部隊（第二十四師団相模隊）の三十七人の戦死者の氏名、出身地、戦死月日、戦死場所をしるしておこう。

西沼勝司兵長（函館市西川町十三）大名で五月上旬。安保二郎兵長（夕張）大名で五月十二日。鳳田与三郎兵長（栄沢町上上等兵（北見）新垣で六月十五日。山崎上等兵（松前）戦死場所、日時不明。菊地一男上等兵（奥尻）新垣で五月。小野大作伍長（札幌北七西二）首里で五月二十七日。山口義雄上等兵（函館宇賀浦町）六月末、場所不明。藤沢四雄上等兵（北見）真栄平で六月七日。谷地武好上等兵（日高様似）新垣で六月十九日。三好俊生上等兵（北海道）五月戦死、場所不明。菅野喜長（山形県）与座岳で六月。西広秀伍長（北見）大名で五月上旬。中村良治上等兵（北見）大名で五月上旬。

村橋伍長（風松内）真栄平で六月十七日。古谷武夫上等兵（北見）コ伊病院で、月日不明。平田豊三郎上等兵（森町本茅部町）大名で五月二十日。荒川上等兵（北海道）出身地不明）戦死場所、日時不明。

真柳手記

真栄平で六月中旬。高田武長（室蘭）五月中旬、場所不明。細川上等兵（北海道）場所日時不明。岡本一等兵（室蘭緑町）五月、場所不明。田鍋旦成上等兵（三笠市中央）真栄平で六月十七日。山内一等兵、山田兵長ともに北海道出身、場所、日時不明。

真栄平で六月末。中原耳西（釧路）新垣で六月十五日。高見朗等上等兵（江別市）大名で

ンバク小竹のおどけなさが残っている。母の名を呼んだろう。北海道の山野を思い浮かべたろう。同胞の繁栄を願い、そのために死んでいった人々の霊魂があるか、ないかはしらない。ただ、沖縄で体験した一つのことを報告する。

ことしの二月十九日、糸満町字真栄里の玉城徳夫さんに案内され、真栄里一帯のジャングルの中、あちこちと歩きまわっていた。朝から歩きまわり、夕方近いのに、資料として持ち帰れるような写真もとれないし、エピソードにも出会わない。

草にうもれた真栄里のごう。手前が玉城さん＝清水本社特派員撮影

『ああ、そうだ。こっちの方にも山部隊の陣地があったな』玉城さんのいいわけのようなとぼけた声、やめるわけにもいかない、汗を流して丘を登りはじめた。とがった岩の道だ。

▲といっが、ボヤボヤしてるから、ムダぼねをおるのだ。れ既の一日とは言うんだ。とんでもないやつをガイドにしたもんだ▽と玉城さんをうらめ、イライラしながら、まといつくようやや木を押しわけ、踏れた歩みを進んでいた。文字どおり、草の根をかきわけてどうくつ陣地を探した。いくら探しても見つからない。しかたなくドまでおりて、畑仕事をしていた農夫を案内にたのみまた登って探した。

▲まるでハリの山だ。おれをからかっているんだろうか▽頂上につくと、あっちの斜面だという。ひどいやぶだ。疲につかまり、木の枝にすがって、糸状に崩した斜面をおりはじめた。猛烈のハブにかみつかれそうな不安を押え、蚊みをかきわけてどうくつ陣地を探した。いくら探しても見つからない。しかたなくドまでおりて、畑仕事をしていた農夫を案内にたのみまた登って探した。

農夫はあちこちと、カマで草をなぎ払いやっと、入り口のつぶれたどうくつを発見した。▲

農夫はおりてゆき、玉城さんは足をたくみに踏んで行く。人気ないやぶの中においてけぼりやくっては大変と、一歩、一歩、右足を踏み出したとたん、いきなり、ひざまで足が地下にめりこんだ。ひざ小僧が猛烈に痛い。ナイフのような竹の先が、ズボン、ステテコを切り、肉に突きささっている。▲地中を踏み抜く▽生まれてはじめて。さては、このなかに洞窟がある▲はるばる北海道から、ここまできていながらふがいつもをして帰るわけ、たしなめてくれた▽ズボンの上から、流れ出る血を押え▲すまなかった。こんなところでさびしいだろう。きたんだ。死後のしあわせを祈る▽この日、この時、はじめて手をあわせた。

（札幌市・月寒）

労したあげくがこれだ▽なんにすることも、はいることもできない。やけになってシャックリを切った。

▲いつ、ボヤボヤしてるから、ムダぼねをおるのだ。れ既の一日とは言うんだ。とんでもないやつをガイドにしたもんだ▽と玉城さんをうらめ、イライラしながら、まといつくようやや木を押しわけ、踏れた歩みを進んでいた。文字どおり、草の根をかきわけてどうくつ陣地を探した。いくら探しても見つからない。しかたなくドまでおりて、畑仕事をしていた農夫を案内にたのみまた登って探した。

農夫はあちこちと、カマで草をなぎ払いやっと、入り口のつぶれたどうくつを発見した。▲

訂正　山兵団司令部故谷岡森久さん＝糸満市大・本間新子さん

沖縄戦士たちの歌

5月2日　米軍は奥武島、中央部、西海岸の三方から猛攻開始。戦況は一進一退。

あゝ沖縄

（33）

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

山1207部隊

最初の敵、レプラ

逃亡患者に手を焼く

第二十四師団防疫給水部（山一二〇七部隊）が、一番先にふつかった敵は、米軍ではなくて、沖縄のレプラ患者だったのだが、その話は、あとまわしにして、この部隊のアウトラインを描こう。

十九年七月六日、鹿児島県林口で部員下令。東安、宝寿の隊単位で、歩兵第二十二連隊などから衛生兵、本科の兵隊が転属してきて、十日、動員完了。▽部長　金井泰治軍医少佐▽副官　飯田秋（さなる）中尉▽業務　石黒英次郎中尉▽経理　斎藤忠四郎主計中尉▽第一中隊（防疫隊）長　新納大尉▽第一小隊長　土佐准尉▽第二小隊長　武内少尉▽第二中隊（給水隊）長　黒沢中尉▽第一小隊長業務、鹿児島警察隊長　藤井准尉など二百六十余人。

このうち現在までに、戦記係に連絡のあったのは、村上友之助さん（小禄市具志堅町畑十三）己原正幸さん（千歳市春日町二丁目）藤沢宗吾さん（西小牧市内閣兼務）のほかの三人だけ。小禄の村上友之助さんは、昭和十九年七月十二日の夜、歩兵第二十二連隊（山一二〇七部隊）四千数百人が、部隊長田中歩兵第大佐に引率されて出発してゆく姿を見送っている。

五日後の十七日天明、山第一二〇七部隊は移動を開始し、西二小隊長　武内少尉▽第二中隊（給水隊）長　黒沢中尉▽第一小隊長業務、鹿児島警察隊長　藤井准尉など二百六十余人。

このうち現在までに、戦記係に連絡のあったのは、村上友之助さん（小禄市具志堅町畑十三）己原正幸さん（千歳市春日町二丁目）藤沢宗吾さん（西小牧市内閣兼務）の

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

（34）

平野大隊の戦闘 ①

遠くトリの声

夜襲前の平和な一瞬

沖縄戦七つの間

5月4日

日本軍総攻撃。船舶工兵隊は、米第一海兵師団の背後に逆上陸して合流。

山三四七四部隊（平野大隊）は首里東北第二大隊（平野大隊）は首里東北部の弁ケ岳めざして前進していた。指揮班長田中松本部隊長（広島村）は、首里付近を通みなが与守備の球兵団第兵の姿情から、あることを読みとった。あたりには第司令部直属の球兵団各部隊（野戦病院、輸生隊、兵器、弾薬、輜重の各補給部隊、野戦重砲兵部隊、西射撃部隊、電波探知機部隊、軍通信部隊）がいた。

彼らは、こうの前を後退してゆく石兵団後衛の悲惨な隊列を見ているのだ。そのうえ、彼らは米軍機に発見されるのがおそろしい。こうの前の道路を、歩（だにく）南上原（みなみうえ）の東南一㌔に石兵団の石嶺陣地ような石兵団陣地が展開され、第一線が後退していることも聞いている。南上原陣地が、敵中に孤立している。石兵団が敗れれば、彼ら・球兵団が、第一線になる。彼らは、それを心配している。いま石兵団の滅戦地（糸満）十一日夕方、平野大隊は、弁ケ岳を出発した。雨雲が低くたれこめ、米軍機もかない。弁ケ岳から一㌔北上して新川部落（こうも）さらに一㌔北上して開墾部落（たちばる）についた。めざす南上原は東北二㌔の地点にある。

開墾部落の北方に小高い丘があり、その丘の北側に米軍がいる。米軍に面したほうは、急斜面で、丘のうえに立つと、攻撃してくる米軍の状態が一望のもとに見下ろせる。丘の南側は、なだらかなゆるい坂で、首里までの距離は四㌔。頂上からゆるい坂を百メートルほどおりたところが、部落が、下のほうへ開墾のようになっている。斜面にへばりついたような名護岳は、ヨウジュ、タチバナ、シノ竹でおおこまれており、部落全体が、南国のなかの世界のように風流である。戦火に焼き払われ、新しく復興したいまも、オヤ！と目を見張るような風雅な構えの家が、点在しており、部落の伝統は失われていない。戦争中からの村長さん新間勇吉さんなどと奥さんのツルさんなどが、西原村字新原二七六番地にいる。沖縄荒行の機会があったら見学するといい。

四月十二日朝、新原（仮称）台地の第六十三旅団戦闘指揮所に平野大隊長以下幕長以上の幹部が集合した。旅団参謀から敵の状況を、石兵団第一線部隊の部落民が作ったらしい粗末な防空壕が、黒い口をあけ、その付近にも人影はない。ギラギラまぶしい南国の日ざしが、部落民や馬の死体が散乱した路上、

新原部落。山すその、あちこちに墓がある。
一漁水本社特派員撮影

戦闘状況を聞きながら、田中幕長は、今夜の夜襲決行を頭の中で考えていた。指揮を終するとと、人影は全然なく、死んだようにうな部落、夜のあけぬうちに、

人影のない墓場、雑草の枯木、のびるだけのびた草は、砂塵キビ畑の上に、光った雨でもかけたように白いている。

宝寺、新原が、きょうは一段と寂しくはけしい。たえまない砲撃音―それがまた、とだえる時間がある。十数秒、いやもっと短いかもしれない。真空の時間―そのなかへ、しのび込むように、遠くニワトリの鳴く声が聞こえてくる。平和だ。こうの戦も、今夜の決死の夜襲も、まるで初世界のできごとのように思えてくる。

コッコッコー：コッコッコー：無心なメンドリの鳴き声。のどかだと感慨が浮かんだ瞬間、反射的に田中松本部隊長は、死の事情にとりかかった。ノモンハンの陣戦地でみがきあげた生と死に対する鋭い感覚である。

北海道から持ち歩いてきた広辞林、コンサイス、ウエブスター辞典、その他、今夜の夜襲に不必要な私物品いっさいをすてた。

◇　◇

訃報　山兵団司令部故木間馨久夫曹長、発大人、本間恭子さん。

（北海道・月寒）

上新聞戦記

あゝ沖縄

（35）

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

第六十三旅団の参謀は「夜襲が成功しても、あすの朝になって、敵の逆襲をうければ全滅する。それよりも、毎夜襲撃をして、敵陣地をうばい、陣地となったら陣地を補強し、左右両隣部隊、後方の砲兵と緊密な連絡をとって、火網を形成することを命ずる」

既述、夜襲をひたすら研究してきた平野大隊にとっては、不慣れな戦法であるが、いままでの米軍の戦法では、毎夜以降は夜襲、夜襲をしていない、成功の可能性もあった。平野大隊長は決意した。大隊の各隊指揮官は、午前八時ごろから前進開始は、大隊本部、各隊命令受領者、有線、無線通信、軍医以下衛生部員、主力機関銃が

沖縄戦・出来ごと

5月5日
一、日本軍の総攻撃失敗
一、出撃部隊の兵力半減。
一、敵は戦車不足し、戦力の低下いちじるしい。
6日
一、嘉数、西原、新川で

平野大隊の戦闘 ②

"とまるな走れ"

目ざす陣地あと百メートル

三百）以後の攻撃目標第一陣地点を判定、夜襲を敢行した。

平野大隊の各中、小隊長は、自分の隊の攻撃目標付近の敵情を真剣に調べはじめた。各隊情報によると、きょう（十二日）、行のため、三十分でも十分でもはや夜からくも、また小隊（部隊より先に進んで、敵情を知ろうとしていたのである。

大隊長は、大隊本部より、はい。

午後二時、平野大隊は、攻撃準備地へむけい前進をはじめた。その居所をさがし、百人近い将兵を、敵しい敵弾から守りながら誘導する田中曹長の苦労は大変だった。

「馬原台地の切り通しの道は、クボ地をまがりくねり、北の方は米軍陣地につながっている。田中曹長らの先行部隊が通過しかかると、敵の野砲、迫撃砲、機関銃などが一斉に火を中した。ねらいは正確。しかも時機をつ

先頭で第五中隊（長・佐野壮一中尉）第六中隊（長・大浦真治中尉）第七中隊（長・不明）がつづいた。

平野大隊長は側官川口准尉を団守備部隊へ先行した。任務は、きょう（十二日）、行のため、三十分でも十分でもはや夜からくも、また小隊（部隊より先に進んで、敵情を知ろうとしていたのである。

大隊長は、大隊本部より、はい。

この、崖の上にまごまごしていれば、大変だ。田中曹長は、鬼のようになって走り出った。

「あのクボ地まで行け！動かない者は射殺するぞッ」

怒鳴りつけ、拳銃を発射した。みんなはクボ地へ飛び込んだ。

曹長は、米軍の砲撃をうかがった。正面からは迫撃砲、右前方に機関銃、左手は、小さい馬の背のような丘、四百メートルくらいかんでいる。米軍は、昨前ここを測定していたようである。

先頭にいた田中曹長は、うしろをふりかえるゆとりもなく、夢中で前へ走り、死角と判断したクボ地に飛び込んだ。

助かった！と思い、うしろを振りかえった。あとに続く指揮官は、全員、あちこちに伏せだれ一人、前進する気配はない。

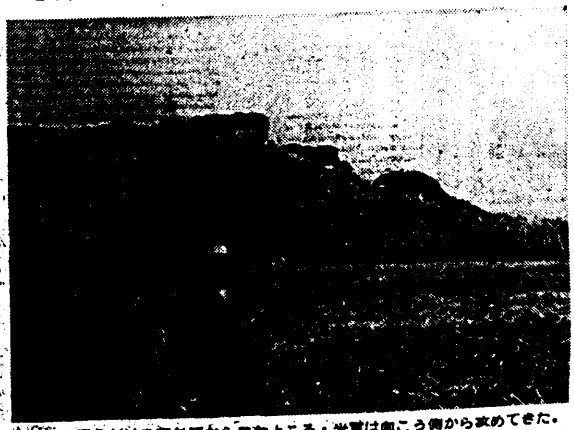
敵の砲火がない。我知古方向の友軍陣地の銃声と敵の小型砲弾（敵は出砲らしい）のサク裂音

—田中曹長は決心した。

本部指揮班の先頭に田中曹長が立った。最後尾は本部曹長。まずけうちに負傷者がでるだろう。それを覚悟して、一気に（間隔出発）・戦死者や負傷者

敵はたえん、こちらの意図を

台地の北側、もとの我部隊陣地。この敵の中だ。あそこ



米軍は向こう側から攻めてきた。

機関銃のかけを斜面から見たところ。

「とまるなッ、走れッ、走れッ」

一人でもおく、今夜の戦闘に参加させなければならぬ。

田中曹長は絶叫した。

「とまるなッ、とまれば、タマにあたる。走れッ、走れッ、走れば、助かるんだッ」

あと百メートル。敵機関銃がうなりをあげ、身近に迫ってきた。

敵に背を向けて倒れる兵隊。つづく兵隊が、おそれてよせる。これで、前のクボ地と同じだ。

「とまるなッ、走れッ、走れッ」

一人でもおく、今夜の戦闘に参加させなければならぬ。

田中曹長は絶叫した。

「とまるなッ、とまれば、タマにあたる。走れッ、走れッ、走れば、助かるんだッ」

敵弾（敵は出砲らしい）のサク裂音。血まれ

砲撃知するところ。敵にわからないとの意図をたのむ。

山岳部隊第六十三旅団本部前哨戦久志岳決戦。本部影子さん

一巻に、あと三百メートル前進しよう。なければならぬ。やっぱ前進は（九月号）

七師団戦記

あゝ沖縄 <36>

戦没一万八千五百の英霊にささぐ

平野大隊の戦闘 ③

犠牲増すばかり

敵の手を読み作戦計画

田中曹長は、兵隊を戦死させまいと、必死であった。多少の犠牲は、やむを得ない。が、戦力を低下させてはならぬ。

陣地へ飛び込んですぐ、人員を調べた。現在中隊以下総生徒員なと七人戦死たよりにしていたのに。これからの戦闘で出る負傷者はどうなるんだ！

田中曹長は、気が立ち、

「出のとき、東北の陣地構築から転出してきた内科医で戦闘の経験がなく、戦闘を非常におそれていた。

けさ、部隊が、前原部落で前進準備をしているとき、既務でわれの陣地についた。

十三日午前六時半から一時間半（八時まで）にわたり、米軍は十五リユウ砲、野砲の集中砲撃を浴びせ、その援護のもとに、M4戦車四十台を、わが平野大隊陣地の正面と、左右の丘のクボ地へ進出させてきた。

大隊指揮班では、事前に、敵戦車の侵入してきそうなクボ地を各中隊に示し、対戦車戦を準備していたが、司令部にも対戦車兵器がない。事態は切迫している。歩兵用のエンピとクワで、各所に肉薄攻撃用のタコツボ、戦車とう掘りをはじめた。

四月十日以来、睡眠は、一日平野大隊の各中隊は、それぞ二、三時間。それも雨にうたれながら、うつらうつらしたと思ったとたん、敵砲撃が撃ってくる。司令部に帰し入れようとするが、無線も使用不能だ。食事も、もろん満足にはない。平野大隊の全員がそうだ。疲れと飢えで、体力気力、きわめて低下、戦死の死体も陣地に散乱したままだ。

敵の照明弾が、絶えずユラユラと落ちては、また、新しいのが上がる。その光りをうけ、夜夜で穴を掘りつづけた。今夜はこの作業に心血をそそぐ。あすは、この穴で敵戦車に体当たりする。眼前で死屍を放つ戦友と同じ運命をたどるのだ！

目前に迫った米兵の砲撃、空からの襲撃と爆撃。一分の休みもない迫撃砲。本部と隊をつなぐ交通ごうは、これらの砲撃で掘り返され、夕方になると、畑のような地形変わり、用をなさない。

後方の前原旅団司令部から延線した有線電話もそうだ。夜明けと同時に開始される砲撃ですぐ断ぜられ、通じない。友軍砲兵の援護が、敵、司令部に向し入れようとするが、無線も使用不能だ。いまだに、平野大隊に残された。本部の指揮班、通信兵らは、車八台、歩兵百人ほどが、本部陣地に前進をむけて攻撃をかけ

ていた。この穴の中に迫撃砲小隊を入れてあったが、手持ち弾は三十発。いつまでこの陣地を守備しなければならぬか不明なので、温存してあった。

大隊砲も、陣地内にかくし、敵戦車が五十メートルくらいに接近するのをまらい、一発が二発ねらい撃ちした。

敵は、一発が命中すると、十台ものの戦車が一斉に退却する。二、三時間は攻撃してこない。が、敵砲兵隊陣地から五百発以上の砲撃が集中する。

「戦死者は出るし、陣地はくずれるし、負傷は大きい。何度、くずれた陣地の補修作業や傷兵を前まで運び、夜があけるまで、白刃したころは、この砲撃に気の毒な負傷兵を運び、戦闘開始。

敵の砲撃は、一発が命中すると、十台ものの戦車が一斉に退却する。二、三時間は攻撃してこない。が、敵砲兵隊陣地から五百発以上の砲撃が集中する。

「戦死者は出るし、陣地はくずれるし、負傷は大きい。何度、くずれた陣地の補修作業や傷兵を前まで運び、夜があけるまで、白刃したころは、

七師団戦記

あゝ沖縄 <37>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

襲いくる敵戦車

肉弾戦のあけくれ

平野大隊の戦闘 ④

「おとうさん、なぜ泣いているの？」田中松太郎さん（札幌郵広島村市街）は、この手紙をつづりながら涙を流していて、おとうさんから不審そうにたずねられたそうだ。私もそうだが、沖縄戦を体験しなかった読者にとっては、この動転は、田中さんの奥さん同様、真実のくみとりづらいアンチ・ロマン（反小説といわれている小説）みたいなものであろう。体験しなかった人は、わからない—肉塊の間田久雄さんも、そういっていう。われわれがまぶ吸をし、生きつづけているこの現実と、十年前のちょうどいまごろ、南の島・沖縄にくりひろげられた現実とは、ぎゃくにも、へだたりがありすぎるのだ。つぎの田中手記の一節が、それを物語っている。

×× ××

敵戦車が、火炎放射で、地面をくまなく焼き払っても、われわれは、肉攻こう（タコツボ状に組った土中のあな）の中で、防毒面（ゴム製の防毒マスク）で、有毒性の空気を清浄化する装置をつけてのせる。場合によっては、戦車のキャタピラの前方へ投げることもある。

戦車とばかん型なメクラで、そのうえ、ソンボだ。暑気とダイミング、さらに戦友同士のなかを、敵戦車に突進してゆき、戦車のラジエターの配管に、十㌢の急造爆雷に手りゅう弾一個をくっつけてのせる。場合によっては、戦車のキャタピラの前方へ投げることもある。

戦車との戦いに日本軍は毎日毛布でつつみじっとしている。火炎放射の油が燃え、地面に浸した毛布でピショピショに浸した毛布でつつみじっとしている。

敵車がなくなっても、車からが毒ガスで、そのうえから、金属を溶かす。

戦車との戦いに日本軍は毎日陣地の組織を変え、敵の意表をつくため、あらゆるものを利用した。焼け残った民家の柱や、砲弾で折れたたち木を寄せ集めて戦車の障害物を作り、破壊されて放置してある敵戦車のなかにも、日本兵がひそんで、近づく敵戦車を攻撃した。

十三日夜、七師団の残存兵は新原部落に集結のため後退していった。陣地の人員は半減し、火炎放射の油が燃えるのも早く敵戦車を攻撃した。

そのうちに、別の穴にはいっている兵隊が、爆雷を点火して投げる。敵は、その間

七師団戦記

あゝ沖縄

<38>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

戦争どこ吹く風

雑談も楽しそう

四月十三日から十四日にかけ石兵団が守備する西部戦線の検機を、志田十郎大上等兵（札幌出身・第六十二師団歩兵第六十四旅団独立歩兵第十五大隊第五中隊＝岸本中隊）の手記によって書く。

十三日、独立歩兵第十五大隊長新垣義三郎少佐は、各陣地の中隊に前進を命じた。第五中隊（岸本孝中尉）は、安波・天久村の銅鑼陣地を出発、北海三郎の砲隊（けいつか）安波茶（あわちゃ）付近でタコツボ陣地の構築にとりかかった。同中隊の第三小隊（兵・長原雅尉以下四十八人）は安波茶と砲隊の中間に位置し、タコツボを掘り、肉薄攻撃の準備をすませた。

野営して十四日をむかえ、夜になった。第五中隊長岸本中尉は各小隊に、敵の幕舎と兵舎を爆破せよ！と命令した。小隊は二人で一組を編成、私（志田）と広瀬一等兵は、第三小隊長長原雅尉によばれた。東方約一キロの米軍幕舎を爆破せよ！——

のんびりしている米軍

相棒——意外な態度の状態に、私（志田）は、おどろきの眼をかきたて、命令を聞いて覚悟を決めた。

青色火薬を三千グラム方の箱に、つめ、上に竜の手手りゆう弾を、つけた爆薬筒。二人はそれを背負った。一人が四発ずつ手りゆう弾をもつ。鉄帽は脱にさした。音をさせないため。午後九時四十分、二人は出発した。

敵は、絶えず間なく照明弾をうった。音をたてないよう。ひじちあげる。二人は地に伏せながら前進し、十一時ごろ、目的地に、たどりつく。敵のいる方向を照明弾の明りでうかがうと、幕舎付近で五、六十人の米兵が、休憩している。のんびりタバコをふかし、楽しそうに雑談している。光景は、戦争どこ吹く風といった様子だ。日本軍とは、天地の差たんだ？それとも、爆薬は帰っているかとたずねた。

川一等兵と志田二等兵はわかれた。

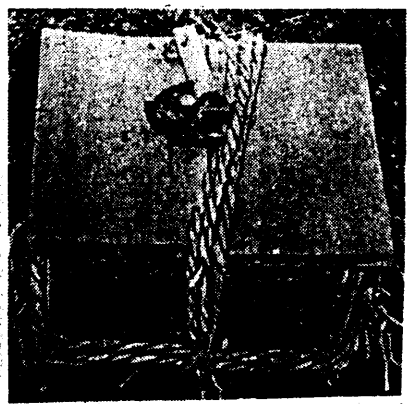
この日夜、米軍主力は、わが陣地の目前まで迫った。米軍は、すでに御殿を焼いていたので、空と陸の共同作戦をとっていた。

朝六時半ごろ、米軍観測機が、まず銅森飛行場やり、七時ごろから、グラマン、カーチス、ロッキードの各種米軍機が爆撃と機銃掃射を午後六時まで浴びせつづける。六時から六時までの観測機が飛んで一日が終わる。これが日課になっていた。

はじめ、日本軍は米軍観測機をバカにしていたが、観測機が空から姿を消すと、かならず編隊、爆撃、砲撃が来襲、地形が変形するまでやられる。

観測機は、機関銃もかっていない。無線機と電波探知機を装備し、日本軍の通信は、全部この電波探知機にとらえられていた。

（敬称・月号）



沖縄戦で日本軍がさかんに使用した急造爆雷
＝米陸軍琉球司令部提供

5月9日 沖縄戦七十五日目 戦局に変化なし

目前に、なにか、白い、まるくふくらんだようなものがある正体を確かめようと思い、私（志田）は、静かに匍匐をもちあげて、進んでいく。もう、まこまこしてはいられない。背中の急造爆雷を大急ぎでおろした。

爆雷の手りゆう弾を発火、幕舎に投げ込む・せん光とともに音。からだが爆風で吹き飛ばされる。たちまちあわてた敵兵が、投げ込めなくなって、引き返したか？敵は、まだ撃ちまくっている。爆雷の音はしない。

腕時計は十一時四十五分。

ひとしきりすさまじかった敵の射撃が、間遠くなった。広瀬

めくらうちに撃ってくる。私（志田）は、岩かげに身をかくし、敵弾をきけた。広瀬はどうしたろう？——彼のことが気がかりだった。しばらく待っていた。

敵兵は、絶叫をあげ、幕舎あがけた。眼前の物体が、かすかに動いた。米兵の顔だ。

ドキンと心臓が飛びあがる。米兵は、絶叫をあげ、幕舎あがけた。

しばらく沈黙していた。私（志田）は、雑嚢の銅の音を聞き守っていると、目前が、ぼうっとなってきた。

「ご苦労であった！」雑嚢はひとことと、れをいい、立ち去っていった。

タコツボへ戻ると、戦友たちは待っていたかのように、夜襲の状況をたずねた。私（志田）は気が重かった。

ことばすくなく、その状況を聞いながらも広瀬が無事、陣地へ帰ってくることを考えつつ、静かに後退をはじめた。

途中で会うかもしれないと考えたが、会わない。約一時間かかって小隊に戻り、すぐ広瀬へ帰ってくることを考えつつ、静かに後退をはじめた。

朝になった。広瀬は戻ってこなかった。爆雷を背負った石川一等兵と志田二等兵はわかれた。

この日夜、米軍主力は、わが陣地の目前まで迫った。米軍は、すでに御殿を焼いていたので、空と陸の共同作戦をとっていた。

朝六時半ごろ、米軍観測機が、まず銅森飛行場やり、七時ごろから、グラマン、カーチス、ロッキードの各種米軍機が爆撃と機銃掃射を午後六時まで浴びせつづける。六時から六時までの観測機が飛んで一日が終わる。これが日課になっていた。

はじめ、日本軍は米軍観測機をバカにしていたが、観測機が空から姿を消すと、かならず編隊、爆撃、砲撃が来襲、地形が変形するまでやられる。

観測機は、機関銃もかっていない。無線機と電波探知機を装備し、日本軍の通信は、全部この電波探知機にとらえられていた。

（敬称・月号）

取材・山岸師団長、木間喜久夫軍曹米軍人本間基子さん

（札幌市・月号）

七師団戦記

あゝ沖縄

<39>

戦没一万八千五百柱の英霊にささぐ

花と兵隊

"ああ白ユリだ"

夜風にのりにおう香

小松と糸満の出身、保栄茂一等兵。十一時ごろ、山かげに（びん）部落に駐とんしていた山三四八〇部隊第三大隊（長・一時帰上した。見上げれば、タ作間正助少佐）の警備（青小牧市役所保護隊勤務）の手配によってつつる。

四月四日、「五月四の八重瀬岳に陣地がえを命ぜられ部隊は、北上する。避難民の列をわけて南下した。

月明りの下を、焼け残った部落を通過。砲弾がさく烈する。花火のようだ。つづいて、また

沖縄戦史よりの抜粋

5月10日

米軍、伊江島六千後「で安慶川渡河、前田兵団は、前田仲間西地から撤退。

砂のもと、視界が開ける。先発の参謀長が迎えに出ていた。岡本軍曹、小林伍長の顔も見える。高盛（ともり）部落が眼下にある。家々は焼け、人影はない。

丘の中腹に沖縄人の墓がある。厚いコンクリート造りの墓。それが陣地だ。大軍上等兵が「墓の中に、二週間ほどまえに死んだというあのくさった死体がはいっていたので、引っぱり出して、前方の畑いうめました」なぞやかに咲き乱れている。花

私（和田）は、連隊本部の連絡兵十官勤務を、指揮班長鶴豊三中尉（札幌）から命ぜられた。連隊本部は、八重瀬岳の四七、大きな自然鍾乳洞内にあ

兵長、島田、伊藤上等兵、成田、三浦、男三一等兵がいた。

銃眼からのぞくと、水平線にならぶ米艦隊の明りと、奥武島（おうむとう）が見え、花のにおいが、夜風とともにただよってくる。

四月五日、海上の米艦隊が砲撃を開始。陣地付近に至弾がさく烈する。昨夜、いいにおいをはなっていたのは白ユリだ。

このあたり一面、散らかに、

私（和田）は、連隊本部の連絡兵十官勤務を、指揮班長鶴豊三中尉（札幌）から命ぜられた。連隊本部は、八重瀬岳の四七、大きな自然鍾乳洞内にあ

そばで、通信手の田山上等兵を乗っている。小気味のいい音ひんしてきた！という。

牧野一等兵が、大隊の通信連絡に専念している。第二大隊の田岡作太郎伍長（武田町月浦十一）もいた第二大隊の月浦小

戻ってゆく。何回も、これをくりかえす。

「敵は浜川付近海岸に上陸の公算あり。これを阻止せ」との師団命令で、部隊は、ひんぱんに部落から、ここ陣地移動したのだ。押し寄せるたびに緊張する。

私（和田）は、連隊本部の連絡兵十官勤務を、指揮班長鶴豊三中尉（札幌）から命ぜられた。連隊本部は、八重瀬岳の四七、大きな自然鍾乳洞内にあ

る。内部はひく、暗闇の部屋式につくられている。連隊長・西郷部隊長が、日焼けした顔で地図らしいものを見ていた。

ごうの入り口に岩があり、岩の上から機関銃でさかんに敵機

七で「暗闇撃滅戦」の声も聞こえ明）が直撃爆撃をうけ、赤黒く血肉が飛び散った。毛のついた頭の皮が、まるまって道路わきに飛びはねる。たちまち、金バエがたかり、黒いかたまりに変わった。

四月十五日、

航空無線電話員として、鬼部隊の兵四人が配属になり、私（和田）は小川隊補生と任務を交代、白ユリの咲く陣地へ帰ることができた。

一方、勢頃者、西風の戦線は、次第に後退、石兵団は、戦死者多数を出しながら、石砲、赤和隊の隊で戦闘中」という情報がはいった。さらに情報として、首里、那覇は、目に目に危機」

たび、保栄茂（びん）部落へ引きあげたのは、四月二十日の夜だった。（以下、前田手記による第二大隊の人行軍を第四十同に掲載する）

八重瀬岳の頂上は、いま米軍の基地になっている。中腹にこうがあり、裏の方から冷たい風が吹いてくる。この横穴をつたわって行けば、山頂に出られるようだ。内部は、清掃者が散乱していた。相当強度の火炎放射を浴びたらしく、岩はだは焼けただれ、ガラスびんが、アメのようにまがっていた。中途まで進んだが、たんたん死の世界へ歩いて行くような気持ちになったので、引きかえした。

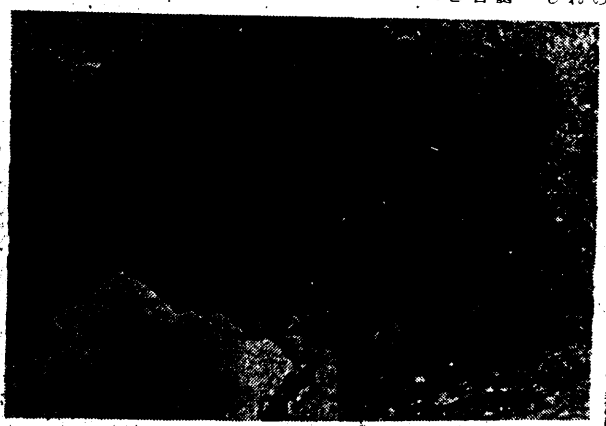
川地いから上陸するとは思えない。敵は、わが山兵団を、一時、時間地区に釘づけにするけん制作戦をとっているらしい。

日本軍の上層部が、そう判断やくたったのは、戦況が大分進行してからである。そして、山三四八〇部隊第二大隊が、ふ

川地いから上陸するとは思えない。敵は、わが山兵団を、一時、時間地区に釘づけにするけん制作戦をとっているらしい。

日本軍の上層部が、そう判断やくたったのは、戦況が大分進行してからである。そして、山三四八〇部隊第二大隊が、ふたたび、保栄茂（びん）部落へ引きあげたのは、四月二十日の夜だった。（以下、前田手記による第二大隊の人行軍を第四十同に掲載する）

八重瀬岳の頂上は、いま米軍の基地になっている。中腹にこうがあり、裏の方から冷たい風が吹いてくる。この横穴をつたわって行けば、山頂に出られるようだ。内部は、清掃者が散乱していた。相当強度の火炎放射を浴びたらしく、岩はだは焼けただれ、ガラスびんが、アメのようにまがっていた。中途まで進んだが、たんたん死の世界へ歩いて行くような気持ちになったので、引きかえした。



八重瀬岳中腹のごう。草にうもれ、内部には、死の静けさが漂つていた
＝清水本社特派員撮影

（札幌市・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄、<40>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

山第三四八〇部隊（野砲兵第四十二連隊、満州では第七九五部隊）第三大隊の編成表（和田勲三さん（苫小牧市役所勤務）の貴重な関係資料によって書く、（コジックは生存者）

▽部隊長西沢清雄大佐▽第三大隊長作間正助少佐（三六、新潟で戦死、仙台市田町出身、妻作間ちよ子、長女作間たえ子、めい三浦光子）▽副官沼田万次郎中尉（四五、真岡村塙、親戚地で戦死、目黒三石町出身、妻、沼田カメ、子供二人）▽指揮班長熊倉備三中尉（二九、札幌出身、北大農科卒）▽観測係将校鈴木備一少尉（二五、東京）▽通信係将校北村松男准尉（三七、長野）▽通信係将校松浦健太郎少尉（二五）▽人事係ならびに暗号係下士官宮尾静雄少尉（二九）▽主計将校沢作雄（長野）▽大隊本部甲書記安井直一曹長（二七、山口）▽観測係甲下士官川合四郎少尉（二五、埼玉）▽獣医務下士官大西松軍曹（二六）石川政秀伍長（二四）▽衛生部下士官松七、群馬）▽同乙永正雄（二六、苫小牧）五十嵐小静駿二曹長（二伍長（二五）▽主計下士官猪又七）▽同関和田鈴安之丞（三二）▽ラッパ手三浦三軍曹（苫小牧）常三郎上等兵（二六）斎藤上等▽通信係下士官岡本秀雄軍曹（二六）兵（三三）▽観測工務兵岸海信雄上等兵（二五）▽暗号手浜田西村正義軍曹（二五）義雄上等兵（二五）▽衛生兵水島秀雄二等兵（二四）▽将校当番谷藤敏夫上等兵（二二）吉田元宮中馬鹿伍長（二三）▽大隊本部乙書記出田清伍長（二三）岡部一雄上等兵（二二）▽大隊本部乙書記出田清伍長（二三）岡部一雄上等兵（二二）▽観測係将校鈴木備一少尉（二九、函館市本町）▽馬事係（Q、帯広）▽観測手伊藤博兵長（二五、東京）▽通信係将校北村松男准尉（三七、長野）▽通信係下士官小林（二六、室蘭）小関信雄兵長（二五、常呂村）島田勇上等兵（二七、長野）▽通信係下士官岡本秀雄軍曹（二六）▽通信係下士官小林（二五）伊藤（二六）森上等兵（二四）伊藤（二三）木村正栄伍長（二三）▽通信係下士官安藤義雄（二三、乙種幹部候補生）小川正勝（二兵（二三）二井朝男（二四）岡五、乙幹、札幌）▽獣医部将校豊一（二四）児玉（二三、十勝）▽衛生将校（二六）市嶋友孝（二五）藤江上秀司中尉（二七、札幌）大出忠（函館）成田三郎（二三）桜木義雄夫少尉（二四）▽衛生将校雄（二六）市嶋友孝（二五）藤島一郎中尉（二七、函館）松見忠雄（二二）米地一等兵（函館）田山貞夫上等兵（二六）山小一郎（二三）小西文雄（二三）西尾（二三）大野（二三）岩渕武（二三）原川（二三）光定俊治一等兵（二三）山形一等兵（二六）長野義雄伍長（二六）等茶（二六）佐々木秀一上等兵（二五、函館）細川米義伍長（二五）万賀未義（函館）田山貞夫上等兵（二六）次郎上等兵（二六、広尾町、以下上等兵）上村一（二六）上田吉（二六）鈴木（二六）佐藤正勝（二六）▽身井弘吉（二六）三上弘（二六）神井義治曹長（二六）能代久郎軍曹（二六）横山光（二六）▽高橋少尉（二五、忠別村）後藤信雄伍長（二六、根室鉄道管理）鈴木備一准尉（二九）森田幸太郎中尉（三五）沢田勇作准尉（二九）松井清蔵准尉（三〇）野々山鈴男准尉（三〇）押山金次准尉（二九）横沢清少尉（二五）恵木鋼伍長（二七）西清曹長（二七）田口国治曹長（二七、小樽）松田清太郎軍曹（二七）塩田清蔵曹長（二七）山崎一雄軍曹（二六）土岡武雄准尉（二七、輝太）

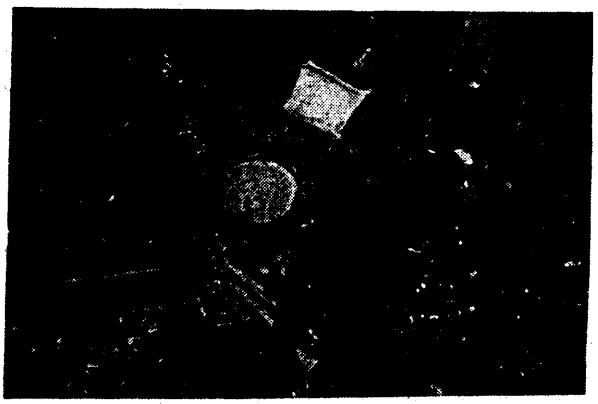
以上百十八人のこの人命係が所有する、現在わかっている生存者二人のうち和田軍曹は、戦死者の写真のほとんどを所有、戦記係に提供してくれたが、さらに生存戦友にかわって、死闘の詳細をつづる決意をかためている。

記憶力の正確さ、これだけの人名、年齢等二十九年間も頭の中に入れておくことは不可能だ、和田さんは、米軍に収容された時、生残者から聞いて、帰還ケイ紙に記入して持ち帰った、戦友愛の記録である。

百十八人の戦死者

戦友愛の記録

19年前、陸軍ケイ紙に記入



八重瀬長洞窟内の遺骨と遺品＝ビールびんは玄米をいれて精白したり、水をいれていたもの＝　清水本社特派員撮影

軍平＝山辺国司令官、太田軍令官、長野義雄大佐、本間等子さん（札幌市月寒）

5月11日

沖縄戦ものがたり

米軍第一次総攻撃

七師団戦記

あゝ沖縄

<41>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

黒砂糖

一瞬、帰らぬ身

いまほほえんでいたのに

四月十七日、山西七四部隊（第十一中隊（兵・木口軍好中尉）と第六中隊（兵・大浦真治中尉）は第一中隊（兵・大城真治西十三）はそれぞれの大隊からはなれ、南田部隊長の指揮のもとに、独立歩兵第二十二大隊の陣地についたが、ここへくる途中のことだ。長浜重治上等兵（糸満市真栄平四五六四号二番）は、前進する部隊の中で、弾薬を積んだ荷車を二人の戦友と引いていた。

行きあう部落民が、部隊を激励してくれる。

「兵隊さん、がんばってください」

「兵隊さん、これ、たべてください」

モンペ姿の娘さんが長浜上等兵に、黒砂糖のひとかたまりをてのひらにのせて、さし出した。荷車の右側の先棒をひいていた長浜上等兵は、敵弾によこれた娘の顔を見た。娘は、ニッコリ白い歯をみせてほほえむ。

「あ、ありがとう」

もっと、なにかいいたかった。敵の迫撃砲弾がなかったら、ここが戦場でなかったら―部隊は前進中だ。立ちどまることもできない。歩きながら黒砂糖のかたまりを三つに割った。左側の小泉正千代一等兵（宜田）と、その左の脇田三次郎一等兵（二十三歳、南部）にひとかけらずつ分けてやる。汗を流してやっている二人は、重い荷車をひいている。

「小泉ッ、小泉、どうした」

小泉一等兵が手で、のどを示す。ひどい傷だ。血がドクドクわき出ている。声が出せない。脇田の前を歩いていた田中千代吉一等兵（那覇、客庁・留内）は左腕がない。目を大きく見開き、口で息をしながら、血まみれになって転がっている。

そのそばに、他中隊の兵隊が一人死んでいた。

「いま、黒砂糖をなめたばかりなのに……」

迫撃砲弾は、なおも降下する。

いきなり、そばの排（はい）水溝（こう）に引きずり込んだ。動けないとばかり思い込んでいた小泉一等兵のすごい力！長浜上等兵は、血にそまってあぶぐ小泉一等兵の顔を、まじまじと見つめた。

（国吉盛の頂上。草だけで、木は一本もなくなっている＝清水茂社特派員撮影）

長浜上等兵は、夢中で血が飛び散るのをおぼえながら、ムシロ担架を捜さなければダメだ、逃げ場を捜さなければ…と、しきりに、いいきかせていた。

あっ！と思った。小泉一等兵が、長浜上等兵にしがみつき、苦しそうにもがいている。今度は長浜上等兵の番だ。左腕の一人を失った悲しみが、胸のなかにあり上がり、涙が出てきた。脇田一等兵を残してやろうという。だれかが戦死体をみんな、両手をせりあげて拝むせんでいた。

脇田中隊の戦死者だ。みんな、いい顔をしている。だが、見ると、長浜上等兵を助けた小泉一等兵は、なにかあるていたが、この時に野戦病院へ送られと命令された。二人は、こんなところで、戦友たちと別れるのはいやだと、大声をあげて泣き出した。だが、この戦場には、第一線へ連れて行くことはできない。戦友たちは、二人を元気づけ、なだめすかして野戦病院へ後送した。

長浜さんは、当時を追想してこういっている。

「黒砂糖をやった娘の、うれしそうな顔と、小泉の顔がいまでも目に浮かびます。私を助けてくれた小泉も、それから田中も、その後戦死したので、野戦病院へ送ったのが別れになりました。重傷の小泉が、私をすごい力でひっぱり込んでくれた好意を、私は生涯忘れることはできない。そして、別れるのがいやだといって泣いたあの二人の面も……」

牛死をともにした戦友が心に刻み込んでいる戦争―山兵団の生き残りはみな、一度は沖縄へ行ってみたいという。人間の戦争と平和を最も鮮烈に体験させてくれた場所として沖縄は、生残者にとって忘れることのできない土地なのであろう。

（那覇・山兵団戦没者慰霊会、故本間青久夫軍曹未亡人本間孝子さん（札幌市・月寒）

沖縄戦史よりの抜

6月12日

米軍総攻撃開始。攻撃の主力は首里、那覇の中間地点にそそがれる。

石兵団の切り込み ①

生還は期せず

孤立の僚友救助に出発

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

第七師団戦記
あゝ沖縄 <42>

十七日夕方、第三小隊長奥原准尉が、第五中隊本部（呼ばれて行った。間もなく隊列を整備で戻ってきた。准尉は、しばらく考え込んでいたが、意を決したように各分隊長に集合を命じた。

「今夜、わが第三小隊は、現在第五中隊（長・岸本孝中尉）がいる安波茶の南方二キロ（第一線付近）に前進してきた敵に切り込みを敢行し、暗夜進みすぎて敵中に孤立している第三中隊（長・松田中尉）を救れ戻すよう命令をうけた。横山等兵（弾薬手）横山兵長（小銃手）で斥候（せっこう）に出発していた）斎藤上等兵（てき弾筒手）蕃田一等兵（小隊長の伝令）中田伍長（第二分隊長・擲弾筒）志田上等兵（軽機関銃手・擲弾手）特に重大である。ここに選抜された十二人の命は、この私にある本、南中上等兵、村上一等兵（小

小隊長のところに集合せよ」（ロケット砲は、砲身が横に五命令にもとづき、切り込み隊が編成された。隊長は奥原准尉。ボタンを押すと、つぎつぎに発射し、横に約二百間隔で弾幕する）

奥原准尉は、緊張している十二人の切り込み隊員の前に立つ。

「今夜の切り込み隊の任務は非常に重大である。生還は期しがたいと思うが、りっぱに任務をはたすよう。時間もあまりないが、出発まで、ゆっくり休め。それから、これは、とっておきのブドウ酒だが、みんなで飲んでゆけ」

飯ごうのフタにつがれたブドウ酒を「いただきます」という間についた。中隊長岸本中尉が奥原准尉以下十二人の顔を見回し、

「ごくろう。今夜の任務は、非常に重大である。生還は期しがたいと思うが、りっぱに任務をはたすよう。時間もあまりないが、出発まで、ゆっくり休め。それから、これは、とっておきのブドウ酒だが、みんなで飲んでゆけ」

飯ごうのフタにつがれたブドウ酒を「いただきます」という間で奥原准尉が二口飲み、田口伍長にまわした。切り込み隊員は無言で一口ずつ飲み、つぎつぎと手渡した。

一同の決意をこめた「ハイ」の声がひびく。つづいて、切り込み作戦の説明が行なわれた。

「軽機関銃手と、てき弾筒手は、のぞき、残りの者は爆薬を背負い、ナマコ山に切り込んで後方の敵軍遮蔽陣地を爆破し、その側面にいる松田中隊を誘導する」

午後十時、奥原准尉以下十二人の切り込み隊員は、小隊のタコツボを出発、中隊指揮所の掩

打ちあげるときと同じように、弾で打ちあげ、七、八百メートル空で発火、パラシュートが開き、マグネシュームが燃えながらおだやかに、地上部隊の照明弾も、三発くらい一度に打ちあげると、真昼のように明るくなる。切り込み隊員は、照明弾の照らすあいだは地面に、じっと伏せ、消えると前進をはじめた。

小さい丘に匍匐、ナマコ山がすぐ目の前にある。百メートルほど右に部落、五、六軒家がある。奥原准尉は、あの部落で敵情をようかい、それから切り込みを敢行しようといい、匍匐のため丘をおりかけたその時、照明弾が上がった。

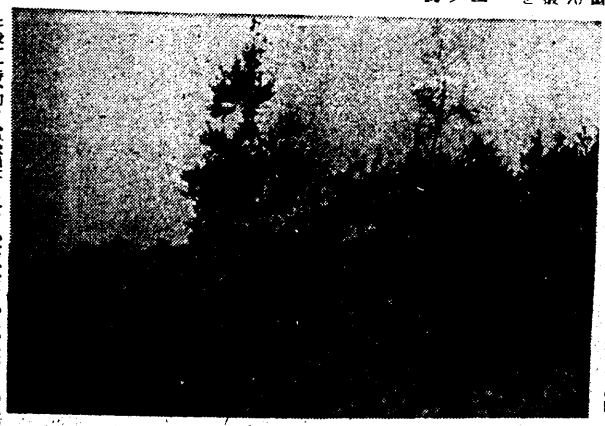
第一分隊の者はすぐ伏せた。第一分隊の兵は、たちを通ってなかに弾薬がよくわかる。第二分隊の者も、第二分隊のうしろを追って走った。走りながら志田上等兵は、第二分隊のだれかが敵弾をうけて倒れるのをチラッと見た。確認している暇はない。猛射を浴びながら部落へ飛び込んだ。すぐクボ地にはいり、軽機関銃を敵に向け、射撃姿勢をとった。ほかの隊員たちも、それぞれクボ地へはいった。しばらくして、敵の射撃がやんだ。新しい照明弾が上がる。志田上等兵のまわりが、急に明るくなった。

横を見ると、弾薬箱を持った兵隊が二人いる。一人は第一分隊の広田一等兵だ。志田上等兵は、小声でたずねた。

「照田上等兵（第一分隊の軽機関銃手）は、どうした？」

広田一等兵は、ヘッとした。志田上等兵を、照田上等兵と間違いなくいたようだ。あたりを見回したが、照田上等兵はいない。すると、さっ撃ちたのが、そうであったかーと、志田上等兵は胸をつかれた

（続き）山兵団司令部・軍本部
第八天雷兵第二大・本部砲子隊
（第八師団・月刊）



高敷高地。砲弾の破片が、赤さびて散乱しており、トーチカ陣地のそばに戦没者がある＝清水本社特派員撮影

午後十一時、切り込み隊員は中隊長や戦友たちに敬礼されて詞をあとにした。

敵の照明弾が明るい。花火を打ってくる仕組みになっているが、海上の米艦船から打ちあげる閃弾は、地上部隊のものより、高度も高く、明るさも強い。し

たのか、急に奥原准尉を追っていい、匍匐のため丘をおりかけたその時、照明弾が上がった。

第一分隊の者はすぐ伏せた。第一分隊の兵は、たちを通ってなかに弾薬がよくわかる。第二分隊の者も、第二分隊のうしろを追って走った。走りながら志田上等兵は、第二分隊のだれかが敵弾をうけて倒れるのをチラッと見た。確認している暇はない。猛射を浴びながら部落へ飛び込んだ。すぐクボ地にはいり、軽機関銃を敵に向け、射撃姿勢をとった。ほかの隊員たちも、それぞれクボ地へはいった。しばらくして、敵の射撃がやんだ。新しい照明弾が上がる。志田上等兵のまわりが、急に明るくなった。

横を見ると、弾薬箱を持った兵隊が二人いる。一人は第一分隊の広田一等兵だ。志田上等兵は、小声でたずねた。

「照田上等兵（第一分隊の軽機関銃手）は、どうした？」

広田一等兵は、ヘッとした。志田上等兵を、照田上等兵と間違いなくいたようだ。あたりを見回したが、照田上等兵はいない。すると、さっ撃ちたのが、そうであったかーと、志田上等兵は胸をつかれた

（続き）山兵団司令部・軍本部
第八天雷兵第二大・本部砲子隊
（第八師団・月刊）

吹きはじめた。閃光弾だ。ヤミのなかに（第八師団・月刊）

七師団戦記

あゝ沖縄

<43>

戦没の一万八十五柱の英霊にささぐ

なるようになれ

痛む傷口消えゆく記憶

石兵団の切り込み

②

小隊長・奥原准尉が駆け寄ってきた。

「軽機は二丁だけかゝえし、お前たちは、ナマコ山の左横国へまわれ。おれと藤田（伝令）と斎藤（弾薬手）の三人は沖中で倒れた組口（軍曹）の軽機で、敵の正面から切り込む。合図は、てき弾四発三発撃ったら、撃ち終わったら切り込め」

志田上等兵と横田一等兵は、准尉にいわれたとおり、てき弾四発を撃ち終わったら切り込めの合図を待った。トーチカの手前から米兵が三人出てきた。なにか怒鳴っている。グーッと、撃ちたい気持ちがたかまる。それを押えながら、待ち続ける。合図がない。米兵はトーチカのなかへはいって行く。奥原准尉は、どうしたのだろう？意外なことに奥原准尉と藤田、斎藤だ。

「軽機は持ってきたが、正面から切り込むのはムリだ。ここにてき弾四発三発撃ち込むから、撃ち終わると同時に、軽機で発射撃をしてくれ」

てき弾四の三発目と同時に志田上等兵が軽機の撃鉄をひいた。抜刀した奥原准尉は、小声で「突っ込め！」と叫び、走り出していった。みんなが、そのあとに続いた。

「軽機前へッ」

奥原准尉の声に、志田上等兵は、軽機に弾丸をこめ、正面から切り込むのはムリだ。ここにてき弾四発三発撃ち込むから、撃ち終わると同時に、軽機で発射撃をしてくれ」

奥原准尉の声に、志田上等兵は、軽機に弾丸をこめ、正面のトーチカに向かった。奥原准尉は、別のトーチカめざして走っていく。そのトーチカの右横四、五十メートルの地点から、敵の機関銃三丁が、走ってゆく奥原准尉の間隔は五十メートルとは離れていない。

志田上等兵と横田一等兵は、准尉にいわれたとおり、てき弾四の発射音を待った。トーチカの手前から米兵が三人出てきた。なにか怒鳴っている。グーッた。

奥原准尉は、こういって、後方からてき弾四を発射した。一発…二発…トーチカからも撃ち出した。そのえい光弾の光りを目標に、志田上等兵は軽機を構えた。別の軽機は田中伍長が持った。

奥原准尉は、こういって、後方からてき弾四を発射した。一発…二発…トーチカからも撃ち出した。そのえい光弾の光りを目標に、志田上等兵は軽機を構えた。別の軽機は田中伍長が持った。

敵たち三人に一斉に射撃を浴びせた。三人が軽機倒しに倒れる。

志田上等兵は、敵のガケに身をかくし、敵の重機を射撃した。重機は銃口を、志田上等兵のいる方に向けた。敵のえい光弾が顔のそばを飛び去る。既がいような感じがする。よく当たらないものだ！と思った瞬間、左肩にショーとあつさを感じた。丸太ン棒でなぐられたような衝撃ーガケ下へとっぱ落ちた背中が、火がついたように、ほ

嘉数高地の日本軍のトーチカ。北方に面したガケの上にある

飛ばされ、のどのくだが見える。横田上等兵は意識朦朧を背負ったままだ。

「意識朦朧をおろせ。それは武器でないから捨ててもいいんだ」

横田は、かすかな声でいい、爆雷をおろさない。ビッコをひいて中田伍長が近寄ってきた。

「左の大腿部をやられたが、ふ、八とも自覚している。切り込みは、うまくゆくとは思えない。ひとまず、中隊長にこの結果を報告しようというとことになった。

志田上等兵は壁きっぱなしの軽機をとりにガケをのぼった。星明りのもと、軽機がある。あたりは、さきほどの激戦があったとは思えないほど静まりかえっている出血のためか眠が痛い。軽機を、小わきにかかえて、ガケをおりた。

中田伍長、横田上等兵、志田上等兵の三人は中隊へ帰る小道をさがし、はうようにして帰路をたどっていた。

志田上等兵は軽機をかかえている腕がだるくなんとも、指間に置いては、かかえなおして歩いた。前方で、疲れて銃を、つつけさきにたたくような音がした。

軽道無傷の弾音！。横に約二対間離で二発ぐらい落下するとつづいて、背後に爆発する爆発音がひびいてきた。

三人は必中になって走った。

志田上等兵は頭の痛みたえきれなくなって倒れた。土砂が、からだを埋めるように落ちてくる。眠くなり、からだを動かしたくない。背中がやけるようにいたむ。その痛みが、だんだん遠くへ去ってゆくようだ。また、やられたか！あとはどうなってもいいと思った。志田上等兵は、ひきずりこまれるような眠気におそわれ、外界のことは、いっさいわからなくなった。

五月十一日

現在和田勇二氏の手紙について、阿部幹市氏（札幌北十七西十四）から次の通知がありました。

石川敏雄軍医務伍長、通信手西岡正敏兵長、岩林義兵長、伊久田正步上等兵は、いずれも昭和十六年三月、初年兵として野砲兵第四十二連隊（熊谷七九五部隊）第四中隊に入隊し、琴阿部が教育があたりました。往時をしのび、万感胸に迫るものがあります。入隊記念の写真を保存してありますので、ご遺族の方は、ご通知ください。拡大してお上げます。なお、能登徳三中尉、熊田二郎中尉についても思い出がありますので、ご遺族の方はご通知ください。

熊谷 山崎国司令部 故本間寿久未曾長第十八、本間誠子さん（札幌市・月寒）

戦記係から

中縄戦十三さの闘

5月14日

米軍、那覇、宜湾の一角に突入。首里、糸満付近にも米軍進出。

あゝ沖縄 <44>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

石兵団の切り込み ③

頼む、水をくれ

死んでもいいから…

沖縄戦没者の記録 5月15日 糸満市真栄平地区で戦死

南田上等兵は、中田伍長の声に、目をさました。敵は、もう撃っていなかった。

起き上がろうとしたかったが、全身に痛い。砂にうもれている力をふりしぼって立ち上がった。頭がズキズキ痛む。三人は前進をはじめた。

しばらく歩いた。前方の暗がりに人影を認めた。地上に生ヤミのなかに視線をこらす。友軍のようである。中田伍長が低い声で「やあー」あいことばを叫んだ「かち！」相手が答える。

ホッと気がゆるむ。立ちしが陣地だった。第五中隊の陣地の方向を教えてもらった。ヤミのつくようだ。負傷で水をのめば死ぬ—ということは聞いていた。しかし、外科軍医は、北支大隊軍医長（宮崎）第三師団（北部）らがいた。南田上等兵は、ふたたび失神した。

気がついたとき、丸太づくりの寝台に寝かされていた。頭がぼんやりしている。

「かわいそうに、いい男だったのに、やはりダメか…」

という声—大隊本部の連絡係外間吉男軍曹（宮崎）だ。南田上等兵は、自分のことを待っているな、と思った。のどがやけるようだ。

水を教えられたとおり進み、鉄くずを見つけた。入り口に大隊軍医長（宮崎）第三師団（北部）らがいた。南田上等兵は、

「オイ、しっかりしろ。いま水を飲ませてやるから…」

村上衛生上等兵（北部）の声だ。「もう、そんなことはどうでもいい—」南田上等兵は叫びたった。しかし、外科軍医は、北支で初年兵の頃父（南田）の部下だった。最後の水がのみたい—

「オイ、しっかりしろ。いま水を飲ませてやるから…」

村上衛生上等兵（北部）の声だ。「もう、そんなことはどうでもいい—」南田上等兵は叫びたった。

村上等兵は、七、八くらいもはいる大型水筒を持って戻ってきた。

「ほら水だ。すこしは元気がつくかもしれん」

口をあけ、水筒の口をあてがった。その水を、南田上等兵は息もつかずにのみほした。

背中の傷は、痛むというより焼けつくようにほてっている。

水を飲んで、ホッとした気持ちになった。体力が満ちてくる。気持ちにゆとりがでてくる。南田上等兵は、中田伍長の声に、目をさました。敵は、もう撃っていなかった。

起き上がろうとしたかったが、全身に痛い。砂にうもれている力をふりしぼって立ち上がった。頭がズキズキ痛む。三人は前進をはじめた。

しばらく歩いた。前方の暗がりに人影を認めた。地上に生ヤミのなかに視線をこらす。友軍のようである。中田伍長が低い声で「やあー」あいことばを叫んだ「かち！」相手が答える。

ホッと気がゆるむ。立ちしが陣地だった。第五中隊の陣地の方向を教えてもらった。ヤミのつくようだ。負傷で水をのめば死ぬ—ということは聞いていた。しかし、外科軍医は、北支で初年兵の頃父（南田）の部下だった。最後の水がのみたい—

「オイ、しっかりしろ。いま水を飲ませてやるから…」

村上衛生上等兵（北部）の声だ。「もう、そんなことはどうでもいい—」南田上等兵は叫びたった。

村上等兵は、七、八くらいもはいる大型水筒を持って戻ってきた。

「ほら水だ。すこしは元気がつくかもしれん」

口をあけ、水筒の口をあてがった。その水を、南田上等兵は息もつかずにのみほした。

背中の傷は、痛むというより焼けつくようにほてっている。

水を飲んで、ホッとした気持ちになった。体力が満ちてくる。気持ちにゆとりがでてくる。南田上等兵は、中田伍長の声に、目をさました。敵は、もう撃っていなかった。

起き上がろうとしたかったが、全身に痛い。砂にうもれている力をふりしぼって立ち上がった。頭がズキズキ痛む。三人は前進をはじめた。

しばらく歩いた。前方の暗がりに人影を認めた。地上に生ヤミのなかに視線をこらす。友軍のようである。中田伍長が低い声で「やあー」あいことばを叫んだ「かち！」相手が答える。

ホッと気がゆるむ。立ちしが陣地だった。第五中隊の陣地の方向を教えてもらった。ヤミのつくようだ。負傷で水をのめば死ぬ—ということは聞いていた。しかし、外科軍医は、北支で初年兵の頃父（南田）の部下だった。最後の水がのみたい—

「オイ、しっかりしろ。いま水を飲ませてやるから…」

村上衛生上等兵（北部）の声だ。「もう、そんなことはどうでもいい—」南田上等兵は叫びたった。

村上等兵は、七、八くらいもはいる大型水筒を持って戻ってきた。

「ほら水だ。すこしは元気がつくかもしれん」

口をあけ、水筒の口をあてがった。その水を、南田上等兵は息もつかずにのみほした。

背中の傷は、痛むというより焼けつくようにほてっている。

高地のトーチカの上から北方の西海岸を見る

というのだろう、死ぬような気がしなくなった。

担架班長の金山義治軍曹（金市）がやってきた。

「南田、どうだ立てるか？」

「死んでもいい…たのむから水をくれ、たのむ…」

あばれる南田上等兵を、村上上等兵が、しばらくおさえていた。が、たまって立って行った。南田上等兵の背中は背から肺はいった銃弾が抜け、大きな傷口を開いていて、そこから肺の動くのが見えた。みんなの意見ではこの重傷では死ぬだろう、水を飲ませてやろうということになった

あす沖縄

<45>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

あす突撃を敢行

玉砕決意 中隊長の声ひびく

怒りと涙

旭川市東旭川町豊田の佐藤留義さんから、独第二五五七六部隊（独立速射砲第二十二大隊）第三中隊（長・田村中尉）の戦闘手記と中隊員の写真が寄せられている。

この大隊の編成は▽大隊長高橋敏大尉▽第一中隊長西本中尉▽第二小隊長吉田中尉▽第二小隊長西畑少尉▽第三小隊長高橋敏准尉▽第二中隊長鄭我知古中尉▽第一小隊長熊田中尉▽第二小隊長長田少尉▽第三小隊長不明▽第三中隊長田村中尉▽第一小隊長高橋中尉▽第二小隊長佐藤留義准尉▽第三小隊長武田中尉▽第三小隊長原村八十五准尉▽第四小隊長不明▽第一中隊長高橋敏大尉▽第二中隊長鄭我知古中尉▽第一小隊長熊田中尉▽第二小隊長長田少尉▽第三小隊長不明▽第三中隊長田村中尉▽第一小隊長高橋中尉▽第二小隊長佐藤留義准尉▽第三小隊長武田中尉▽第三小隊長原村八十五准尉

佐藤留義衛生上等兵の手記によれば——

部隊は、十九年九月九日、門司港出航。九月十一日夕刻、那覇港上陸。那覇に一泊後、中頭高地（中隊本部所在地）の西方五百メートルの大刺名陣地（ないしゃた）の玉砕軍曹（砂川）から、第三中隊は宜野湾部落に移動し、それぞれ陣地構築をはじめた。ここで十月十日の空襲をうけた。北部行衛生伍長（ソロモン島帰り）もいた。

二十年三月二十日、甲号戦備下令。四月一日、米軍上陸。佐藤上等兵所属の田村中隊は、西原村八十五高地に速射砲（口径四十七ミリ）の砲列をひき、待機した。米軍上陸地点を守備する第三中隊（長・田村中尉）の戦況が伝えられていた。

四月四日未明、西原村八十五高地で酒田上等兵（比布）も、松井上等兵と一緒に戦死した。

M4戦車は、大山部落を出発し、前方七百メートルに接近した。第一小隊（長・高橋中尉）の陣地から、射撃開始の報告。同小隊が五台目の米戦車を破壊したとき、電話がかかってきた。「負傷兵三人、衛生兵の派遣たのむ」田村中隊長は、高橋衛生兵と私（佐藤）のほか担架兵四人に救護出発を命じた。

弾丸の雨のなかを、六人はバラバラにわかれ、長坂陣地へ走った。陣地は、火と煙りにつつまれている。生存者がいるのだろうか」私（佐藤）は不安になった。陣地の入り口に、担架があり、戦死体が六体ころがっている。左手の盛岩鍋では、米戦車が、真っ赤になって燃えていた。鍋が、激しく、地にふせたまま身動きできない。私（佐藤）は、二十メートルほど走って山をのぼり、谷底へころげこんだ。ほっとして、あたりを見回すと長坂中尉はじめ十二人の負傷兵中砲撃で酒田上等兵（比布）も、松井上等兵と一緒に戦死した。

M4戦車は、大山部落を出発し、前方七百メートルに接近した。第一小隊（長・高橋中尉）の陣地から、射撃開始の報告。同小隊が五台目の米戦車を破壊したとき、電話がかかってきた。「負傷兵三人、衛生兵の派遣たのむ」田村中隊長は、高橋衛生兵と私（佐藤）のほか担架兵四人に救護出発を命じた。

弾丸の雨のなかを、六人はバラバラにわかれ、長坂陣地へ走った。陣地は、火と煙りにつつまれている。生存者がいるのだろうか」私（佐藤）は不安になった。陣地の入り口に、担架があり、戦死体が六体ころがっている。左手の盛岩鍋では、米戦車が、真っ赤になって燃えていた。鍋が、激しく、地にふせたまま身動きできない。私（佐藤）は、二十メートルほど走って山をのぼり、谷底へころげこんだ。ほっとして、あたりを見回すと長坂中尉はじめ十二人の負傷兵

ウ弾を握りしめた。自爆しようー発火の機会をうかがっていた。二人で負傷兵の手当てをした。

夕刻、中隊陣地に帰りついた。

四月九日。米戦車隊は、きのうの大刺名陣地で死守する「玉砕を決意した中隊長の声が、不屈の闘志をこめてひびく。

兵隊はそれぞれ、いっさいの私物品をこうのなかに積みあげた。山になったなつかしい品々のうえからガソリンをかけ、火をつけた。軍服に記入した各自の名前は焼失した。新しいフンドシをしめる。敵襲、配置を知っている者はそれぞれ胸に飾った。

戦友同士は、手を握りあって別れのことばをかわしあい、負傷兵には、手りゅう弾を与えて、自決に手ぬかりのないよう教えた。「中隊は、あすの明、敵戦車に対し突撃を敢行しこの陣地を死守する」玉砕を決意した中隊長の声が、不屈の闘志をこめてひびく。

「中隊は、あすの明、敵戦車に対し突撃を敢行しこの陣地を死守する」玉砕を決意した中隊長の声が、不屈の闘志をこめてひびく。

兵隊はそれぞれ、いっさいの私物品をこうのなかに積みあげた。山になったなつかしい品々のうえからガソリンをかけ、火をつけた。軍服に記入した各自の名前は焼失した。新しいフンドシをしめる。敵襲、配置を知っている者はそれぞれ胸に飾った。

戦友同士は、手を握りあって別れのことばをかわしあい、負傷兵には、手りゅう弾を与えて、自決に手ぬかりのないよう教えた。

昭和十九年九月一日沖縄出発を前にして門司神社前での記念撮影。
独立速射砲第二十二大隊第三中隊一同＝東旭川・佐藤留義氏提供

中隊の玉砕の間

首里・松川・那覇の戦闘つづく。

5月16日

七師団戦記

あゝ沖縄 <46>

戦没の一万八千五百柱の英霊にささぐ

子供の死で狂う

何が起きても感情ない

笑う女

四月五日午後八時—死の陣前。きいぞ第三中隊に、大隊本部撤退命令が伝令がきた。戦傷者を引き連れ、大隊本部撤退命令で、第三中隊は合流、大隊本部の位置まで後退するよう命ぜられた。

私（佐藤）は、うれしかった。あすの朝といえど、安全なものではなかったが、敵弾をさけながら後退した。

戦闘

四月六日、第二中隊は主力陣地（我如古）に合体。七日、第二小隊（武田少尉）の第二分隊は、我田陣地で戦闘後、我如古陣地に合体。

四月十日、我如古陣地の第二中隊は、陣地を来襲に馬のり攻撃されて敗。

四月十五日、第二中隊の我如古陣地は、艦砲と爆撃をうけて崩壊。森川陣地に移る。

四月十七日、第二中隊は、森川陣地で戦闘後、西原の大隊本部陣地に合体。

四月十八日、第二中隊（長・西本中尉）第三中隊（長・田村中尉）第二中隊（長・田村中尉）第三中隊（長・田村中尉）第二中隊（長・田村中尉）第三中隊（長・田村中尉）第二中隊（長・田村

七師団戦記

あゝ沖縄

<47>

戦没二万八十五柱の英霊にささぐ

手リュウ弾くれ

自決する兵は叫んだ

ガスエソ

佐藤手記　洞窟わきに、材木でも放り出したように、戦死体負傷兵がなげ出されていた。

負傷兵は、そばを歩く者の足首を掴きつけて頭をあげる。

「衛生兵殿ッ、助けてくれ！」「水をくれ」必死になって叫ぶ。—おれが助けてやれるくらいなら、君たちの戦友が救てゆくものか。おうゴメンだゴメンだ！あきらめるんだ！心で叫ぶ。しかし、負傷兵には

「しっかりしろ」と、はげましの声をかけ、すばやく通りすぎる。（五月二十二日から二十八日まで豪雨が降りつづいた）

夜は、毎夜のように雨が降り野も山も畑も、ドロ沼に変わる。ドロまみれの負傷兵が、あちこちで救いを求めている。だが、だれも振りむかない。助けを求める声は、悲痛をきわめた。

これが勝ち戦であったら、みんな名誉ある白衣の勇士なのにゴミアクタのように捨てられている。彼等は、命のかぎり救いを求めている。その前を通る傷一つない自分なのに、たまって見ないふりをして通りすぎて行かねばならぬ。どうすることもできないのだ。おれも、君たちを捨てて行った戦友たちも、みんなこんなでは泣いている。君たちだって、それはよく知っているはずではないか—だんだん歩みを早め、逃げるように走り出したり、行動した。勝つためではない。すこしでも敵の進撃を遅らせるためだ。われわれは、戦力なく、体の眼と同じように青い。死刑の迫っているのがわかる。

「この傷では、とても生きてゆけない。おれは自決する。眼から手リュウ弾をとってくれ」

小松上等兵が叫んだ。自決する兵隊は、たいてい、ガスエソにかかっている。足がブクブクにはれあがり、痛みをうったえる。

「あとないから、お前たち犬の中にはいれ」

小松は叫び、私（佐藤）のとってやった手リュウ弾を高々と、自爆した。私（佐藤）は、たのまれるまま、平然と手リュウ弾を手渡した。自分が死ぬ番だった。

こうして死んでゆく戦友の叫び声と、手リュウ弾のサクレツ音が、あちこちでひびいた。

五月末ドロで動けなくなつた米機械化部隊＝米陸軍兵隊写真部提供

迫撃砲弾がサク裂するたびに異様な叫び声がひびく。砂じんが消えると、かならず、戦死体が二、三つころがっていた。

石兵団の洞穴のそばでは、直撃弾をうけたらしい。人間のかたちを失った死体が散乱している。頭は飛び、足はちぎれ、脳は露出、天井には、脳ミソのようなものが、ベッタリとはりつき、血が、雨だれのように、したたり落ちていた。

照明弾が、戦死者の顔を青黒く照らし出す。負傷兵の顔も死刑囚のように青い。死刑の迫っているのがわかる。

「この傷では、とても生きてゆけない。おれは自決する。眼から手リュウ弾をとってくれ」

小松上等兵が叫んだ。自決する兵隊は、たいてい、ガスエソにかかっている。足がブクブクにはれあがり、痛みをうったえる。

「あとないから、お前たち犬の中にはいれ」

小松は叫び、私（佐藤）のとってやった手リュウ弾を高々と、自爆した。私（佐藤）は、たのまれるまま、平然と手リュウ弾を手渡した。自分が死ぬ番だった。

いくらか具体性を欠いているが、独立混成第四十二大隊の行動を記録したものとしては、

死は、また、待ちなくしのび寄ってきた。夜のない静かな夜。ふと目をさます。からだがだるい。あたりでは、みんなが、よく眠っている。急に死の不安におそわれる。となりの戦友をゆり起こす。いくらゆさぶっても起きない。からだが硬直している。死体になっていた。

軍司令部は、摩文仁（後退）を始めた（六月二十八日、豪雨の中）負傷兵たちが、たがいに指さあい、ながめつ、ながめつ、ドロの中をはっている。岩にすがって進む者もあった。大部の負傷兵で、地獄絵のような光景だ。

「負傷兵を捨てて、逃げるなんて」

絶えた。警告だったという彼は、よくピンクをとられていたが。長田兵長は、先輩としてはいまわり、高橋中尉は、戦闘上、先輩といっしょに自殺した。

負傷兵のあ、ものすごい。

自里のこうでは、母親が腰を、ちぢかれて絶命、胸に、しっかり赤ん坊を抱きしめていた。赤ん坊が火のついたように泣いている。そばを、負傷兵が列をなして通る。だが、赤ん坊を抱きあげる者はいない。他人の胸で思う存分泣き、眠るように死んでゆく。母親の胸で思う存分泣き、眠るように死んでゆけば、いいんだ—それ以外にどうにもならない。

六月二日ごろ、太田、第一中隊、第二中隊の生残者は小渡（おど）部落へ後退、第三中隊は摩文仁部落に後退した。

六月十八日、生残者の一部が賀谷支隊に転属し、その他の将兵が、摩文仁（約二千㍍の高地）に転進中、攻撃をうけた。以後、損害多く、組織的戦闘力を失った。—と以上で原生者の資料は記録を終えている。佐藤手記は時間、場所、将兵の名前なども、

ただ一つなので、もう少しつけ。

× ×

ひるは洞穴内にかくれ、夜間軍の救援を待っていた。それが、いつ来てくれるか、そのあても見当もなかったが—

× ×

沖縄戦士たちの闘

5月18日

日本軍、南部村シュガー高地で戦闘。

闘争　山形聯隊第帝京本間寿久参謀長夫人・本間恭子さん（北海道・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄

<48>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

死ぬなら中隊と

重傷の身、後退こばむ

斎藤ラッパ手

佐藤手記　六月十六日、摩文仁陣地に戻り、中隊長に帰隊報告をした。

私（佐藤）は、とりあえず、止血措置をしてやった。それ以上の手当てをしてやりたいにも、衛生資材がない。軍医のいる位置まで後退をすすめた。斎藤は決然たる態度で

「自分は、中隊の位置で、中隊長や中隊のみんなと一緒に戦死する。佐藤、オレをこのままにしておいてくれ」

といい、その場を動こうとしない。四からみるみるうちに血の気がなくなり、苦しみだした。しまいには、右腕を軍刀で切り落してくれといいはじめた。しかし、それも資材がないのでできない。

軽迫弾がサク裂した。土砂と硝（しょう）煙がおさまって見ると、斎藤は破片創をうけ、岩の下敷きになって戦死していた。午後四時ごろだった。

高畑中尉は、第一中隊の小隊長だったが、隊員のほとんどが戦死したり負傷したため、第三中隊に配属になっていた。この日、私（佐藤）は、高畑中尉、当番の小路谷上等兵、桑原伍長らと四人で手リュウ弾をなげていた。

岩から三尺ほどの地点でロケット弾がサク裂した。中尉は右足を負傷、歩けなくなった。私（佐藤）は中隊とともに前進し中尉は小路谷上等兵と、その場に残った。その後、桑原伍長から、高畑中尉が手リュウ弾で自決したということを聞いた。

六月十七日朝二時、中隊は摩文仁前方の一〇八高地めざしたった一門残った速射砲を引いて前進した。高地に到着したのが三時。陣地に砲を固定しようと、柚田伍長、東海林兵長、松本兵長など分隊員が砲を引いてきたが、一発目の弾丸がつかない。脚部には、旭川の

米軍に収容された日本兵が六月末ごろ日本軍残存兵に降伏をさそいかけた
―米軍軍政球部司令部提供

自爆した。

私（佐藤）は、まっくらの水がのみたかった。水を探して歩きまわった。いくらさがしても見つからない。脚部には、旭川の軍司令官の命令が伝えられた。

「戦況は遂に最後の段階にたちいたれり。予（よ）は、本夜、軍の先頭にあり」

すべし。銃弾はすでに、その場を去り元帥閣下に捧げあり。自己を公会にみるなかれ、それは我がこころなり。閣下を進んで行った。

私（佐藤）は小銃上等兵（行方不明）の手記に、以上で終っている。この頃から、米戦車隊が、摩文仁に戻ったとか、つぎの米軍側の資料から推定される。

夜になると、長期戦のうち、夜

生存者兵をあげて総攻撃にいでんとす。各隊は、本夜一斉に敵を攻撃モルヒネ注射をうち、薄化粧をした看護婦は、軍楽

わが家（佐藤宅）で、バケツになみなみとふれる水がうかぶ。水が飲みたかった。

最後の一兵に至るまで敵を攻撃

に砲弾が落下した。三人が即死。柚田伍長ら十四人負傷。最後の火砲を失った松浦兵長は、東海林兵長ら四人と手リュウ弾を発火、天皇陛下万歳を叫んで

中将自決、重傷者には、軍医が

六月二十二日、牛島中将、長

くことができない。岩の下にうめみのみ、母を呼びながら死んでいった。岩かげで一人の女学生が自決した。

「戦いは、すんだのだ。飛行機が飛んでもこわくない。昼のうちに岩の下から出ろ。夜間でるものは射撃する。武器はすべて

「ながい間行動をともにし苦戦をつづけてきたが、本日をもって中隊を解散する。二人あるいは三人で組をつくり、切り込みをかけ行する。みんなは、命をながらえ、本隊の北側に集結すべし」

この切り込み隊を、旭切り込み隊と名付けた。

将校が二人、岩の下から出てゆく。私と兵隊も、そのあとにつづいた。兵の遺体は、焼き捨てけ、小川の横に並べて立てされた。米兵にとりまかれ、部隊名や氏名をたずねられた。トラックで収容所へ運ばれた。

夜風がさわやかで、弾丸のこない安心しきった夜だった。夜中に空襲と砲撃の夢を見て、目をさました。外では、カミナリがなり雨が降っていた。

× ×

佐藤留蔵さん（旭川市東旭川町出身）の手記に、以上で終っている。この頃から、米戦車隊が、摩文仁に戻ったとか、つぎの米軍側の資料から推定される。

戦争　山田司令官、牧本参謀長、喜久夫軍長ら八人・本間参謀長ら（礼制部）自殺

沖縄戦さまざまの間

5月19日

日本軍、浦添村シュガーローフ奪取
いかなれず。米軍、糸満、高嶺武、真栄原、知念半島に侵攻開始

七師団戦記

あゝ沖縄

<49>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

『沖縄戦・米軍の記録』から

米軍記録

豊富だった兵器

防衛に全砲二百八十七門

沖縄戦とその間

5月20日

米軍、首里占領の態勢をとる。

沖縄駐とんの日本軍の兵器は、地雷、手りゅう弾、小型爆薬など多量に保有していた。

その他にも、日本軍は弾薬、十二門、さらに七十五ミリ高射砲高角砲七十二門、二十ミリカノン小型砲としては七十ミリ、七十五ミリの曲射砲や大砲などが百七十ミリの対戦車砲二十七門が、陸軍の各部隊に配備された。しかしながら、戦車隊それ自体としては中型戦車十両台、軽戦車十三台で、その兵器としては、一番大きいもので、中型戦車装備の五十七ミリ砲であった。

日本軍は、大いに機関銃によっていた。数も、おどろくべきほど多く、弾薬も実に豊富だった。部隊は全部で重機三百三十三丁、軽機千二百八十を保有し、戦闘中には、さらにこわれた戦車や飛行機からはずしたので、機関銃の数はふえ、第六二師団（石兵団）だけでも、第三十二軍の機関銃のほとんど半分くらいが弱体化されていた。

沖縄の日本軍砲兵の装備は、五十四門が、地上戦闘用として使用されることになっていた。

日本軍の臼（きゅう）砲部隊の主力は、八十一ミリ砲九十八門を装備した砲兵二個大隊であった。そのほかに、これまで類例をみないほど多数の三百二十ミリ臼砲を備えていた。

日本の陸軍で唯一をほこる第一砲兵連隊は、この三百二十ミリ臼砲を二十四門も持っていた。

ふつうの基準内の地上戦闘部隊でも、五十ミリ迫撃砲千百門を装備していた。

米戦車隊に対する方法としては、日本軍は、ほとんど、想像以上に多数の対戦車砲、とくに四十七ミリ砲にたよっていた。

日本軍の独立対戦車隊は、全部で四十七ミリ砲五十二門をもっていたが、このほかに、三十七ミリの対戦車砲二十七門が、陸軍の各部隊に配備されたが、しかしながら、戦車隊それ自体としては中型戦車十両台、軽戦車十三台で、その兵器としては、一番大きいもので、中型戦車装備の五十七ミリ砲であった。

日本軍は、大いに機関銃によっていた。数も、おどろくべきほど多く、弾薬も実に豊富だった。部隊は全部で重機三百三十三丁、軽機千二百八十を保有し、戦闘中には、さらにこわれた戦車や飛行機からはずしたので、機関銃の数はふえ、第六二師団（石兵団）だけでも、第三十二軍の機関銃のほとんど半分近くをもち、最も強力な部隊であった。

×　×

『沖縄南部の要塞（さい）地に迫った米軍は、ほとんど十三日間クギつけにされていた』

一、第二十四軍団は四月十九日（東京標準時）沖縄南部防衛陣地に対し、大規模兵力により攻勢をとった。

同日早朝より米陸軍ならびに海兵隊の砲兵隊は、米太平洋艦隊の戦艦、巡洋艦その他艦艇とともに、本島の四用部隊の陣地に集中砲撃としては、夜襲失敗以来、米軍の砲撃、艦砲射撃をおびただしい砲弾を浴びながら、消極的な持久戦をつづけていたが、十七日西原村嘉地部落に後退、第二大隊（平野少佐）は我如古から棚原に後退、第三大隊（長・田川少佐）は中間部落にいた。第三大隊の第十一中隊（木口中尉）と第六中隊（大浦中尉）は、古田部落の右翼をうけ、第一線の第九十六師兵、第一線の兵士は、午前六時から八時までのあいだに攻撃を開始し正午までには左翼に進出、牧港（まちなと）に突入した。

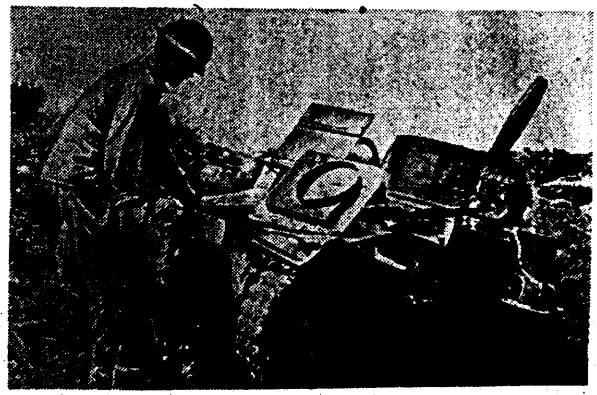
一、日本軍は野嘉、日（ぎゅう）砲ならびに小火器をもってがん強に抵抗した。

牧港から那覇までは約六キロ。米軍は牧港を占領後は、すぐ前の伊祖城跡にはいり首里を攻撃するコースをとることが予測された。これで日本軍の左翼防衛線の一角がくずれてしまった。

歩兵第二十二連隊第一大隊（長・鶴谷少佐）は、十三日の夜襲失敗以来、米軍の砲撃、艦砲射撃を浴びながら消極的な持久戦をつづけていたが、十七日西原村嘉地部落に後退、第二大隊（平野少佐）は我如古から棚原に後退、第三大隊（長・田川少佐）は中間部落にいた。第三大隊の第十一中隊（木口中尉）と第六中隊（大浦中尉）は、古田部落の右翼をうけ、第一線の第九十六師兵、第一線の兵士は、午前六時から八時までのあいだに攻撃を開始し正午までには左翼に進出、牧港（まちなと）に突入した。

右翼において、四百財ないし七百財進出、牧港（まちなと）に突入した。

一、日本軍は野嘉、日（ぎゅう）



五月四日米軍の総攻撃で破壊された日本軍戦車＝米陸軍琉球司令部提供

これらの火力で前進をはばまれていた米軍は、四月十九日付け、つぎのニミッツ司令部発表を行なった。

十九日には早朝から米第二十四軍団の第七師団、第二十七師団、第九十六師団の兵力をもって総攻撃を開始した。

訃報　山兵団司令部　故本間雅晴氏夫人・本間芳子さん（本社部・月末）

七師団戦記

あゝ沖縄

<50>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

鈴木手記 ①

第四十五回の佐藤留義さんの手記（上から三段目、右から三行目）に「米軍上陸地点を守備する賀谷支隊からは、五分ごとに戦況が伝えられていた」と書かれてある。

この賀谷支隊（石兵団第三五九三部隊独立歩兵第十二大隊）本部にいた鈴木竜一さん（名寄市西四条南二丁目、電話二五二三）から手記が寄せられているので掲載する。

「米軍上陸地点を守備する賀谷支隊からは、五分ごとに戦況が伝えられていた」と書かれていたはず。遺族は、旭川にお

鈴木さんは、昭和二十九年、

全員切り込み！

海軍砲台から無電はいる

木社が沖縄に北進調査を終てた時生き残りとしては最初に沖縄している。

大隊長賀谷吉大佐については七師（金沢）の柴谷五郎さん（札幌市豊平三条西丁目＝貝下渡欧中）は、次のように語っていた。

賀谷さんは山口県生まれ、広島幼年学校卒。陸士第三十三期生。同期の名人で未亡人は、もとの旭川市助役御手洗氏の令嬢。その弟に陸士出身の少佐がいたはず。遺族は、旭川にお

られると思う。

××　××

四月一日ごろ＝賀谷支隊は、本部を請見里、第四、第五中隊は

で接近してくる。が、接岸はしないで反転し、引きあげてゆく米軍はこれを、四月一日の数日前から、何度もくりかえしていた。

だから、四月一日午前六時ごろ、いつもの倍くらいの艦艇、輸送艦、軍艦が間近に見えたが私（鈴木）は数が多いなと思ったくらいで、めずらしいとは思わなかった。

見ていると、全艦艇が陸地に向かって進んでくる。北の海岸

六時半ごろ、賀谷支隊は、無線手を通じ、義波岬方面の海軍砲台に、砲撃開始を命じた。それから間もなく、海軍砲台から「全弾撃ち終わり。これより全員切り込み！」

われわれ賀谷支隊本部は、米軍を撃ちやすい位置に移動した。つけねらう水上機母艦が、陣地の上空を金属音をひびかせて旋回すると、間もなく、艦砲

供提供部令司球琉軍米＝群艦米の（点地陸上の軍米）、北谷海岸、月四日四

銃音が聞こえてくる。すさまじい。

かった米軍の艦砲射撃が、かんまんになった。グラマンの機銃掃射と爆撃は、相変わらず激しかった。

砲台は義波岬方面の海軍は越来（こえく）胡座（こざ）納方向をめざすもの、まっすぐ北谷海岸に進んでくるものなどさまざまだ。賀谷支隊は、米軍が上陸する水際を攻撃するよう命令されていたので、一発も発射しなかった。

米艦隊の一斉砲撃が始まった。水上機母艦五、六機が、わが陣地上空を飛ぶ。艦載機グラマン数機が、降下しながら機銃掃射を浴びせ、上昇するとき、ロケット弾を、発射して飛び去る。

陣地が請見里（本部陣地）からは西へ四キロ、桃原（一三中隊陣地）からは二キロで、北谷海岸の海が見える。米艦隊が沖合いに停泊し、甲板が、いまにも陸しそうな勢いを示して、海岸近くまで進してくる。

上陸した米軍がわが主力陣地に、一斉射撃を開始した。距離は約五百メートル。その報告を、賀谷大佐は緊張した顔で聞いていた。

第三中隊が力戦中なのだろう、義手納方面から、激しい銃撃切り込み！行なう」と無電が入った。その報告を、賀谷大佐は緊張した顔で聞いていた。

第三中隊が力戦中なのだろう、義手納方面から、激しい銃撃

一千人。米軍は水陸両用戦車は陸あげしたが、まだ第次第は一門も陸あげしていない。

命令で、東海岸の大城部落まで後退した。途中、学校の校庭で人員をしらべた。三百八十余人だった。

つぎではなかった。夜、部隊は、嘉手納方面から、激しい銃撃

第四中隊は、第一中隊とは、連絡のとれないようだ。独自で行動しているようだった。

四月二日も、同じような戦闘が続いた。米軍の前進は、めざましい。

夜中に第一陣地撤収について、第四中隊長戦死の報が伝わる。第四、第五中隊は、本部の近くに集結した。第二中隊とは、連絡のとれないようだ

七師団戦記

あゝ沖縄

<51>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

声をのみ棒立ち

ゴウの中に積み重なった人間の頭

鈴木手記 ②

六月朔、再編成が伝えられ、木機付の松本曹長も第三中隊に復帰することになった。ごうの外は、第一線ほどではないが、それでも、敵砲のリュウ散弾がサク裂し、時おり、グラマンが爆弾を爆撃してゆく。

松本曹長は、ヒゲをそりはじめた。ひさしぶりに中隊へ帰るのだからーといって。

私（鈴木）たちは、ヒゲくらい、どうだっていいではないかと、なんどもいい、ヒゲそりをやめさせようとした。

しつっこいくらいにいった。

あとで考えてみると、変わったことだった。

連続的に爆発音がひびき、私（鈴木）たちのいる民間ごうが、ゆれ、内部の土がくずれてきたのは、それから二、三十分後だった。出て見ると、グラマンが、山ぎわをミシンでぬうように爆撃している。ぼんやり見ていては危険なので、ごうへはいった。はいってはみたが、気が落ち着かない。また出て、外部のようすをうかがった。

本部が火をふいている。真っ赤な火勢がすさまじい。夢中でくがエンピは小さい。土はいくらもはねられない。一刻も早く中の者を救助してやろうと、みんな、目の色を変えて発掘をいそいだ。どれくらいかかったかー時間は、長かったような気もするし、それほどではなかったようにも思える。

やっと坑口が開いた。同時に、発掘にあたった者は、エンピを握ったまま、声をのみ、棒立ちになった。顔から血の気がひいてゆく。私（鈴木）だけでというのは、北海で戦闘中私のは、それから二、三十分後だった。出て見ると、グラマンが、山ぎわをミシンでぬうように爆撃している。ぼんやり見ていては危険なので、ごうへはいった。はいってはみたが、気が落ち着かない。また出て、外部のようすをうかがった。

本部が火をふいている。真っ赤な火勢がすさまじい。夢中でくがエンピは小さい。土はいくらもはねられない。一刻も早く中の者を救助してやろうと、みんな、目の色を変えて発掘をいそいだ。どれくらいかかったかー時間は、長かったような気もするし、それほどではなかったようにも思える。

やっと坑口が開いた。同時に、発掘にあたった者は、エンピを握ったまま、声をのみ、棒立ちになった。顔から血の気がひいてゆく。私（鈴木）たちは、ヒゲくらいどうだっていいではないかと、なんどもいい、ヒゲそりをやめさせようとした。

しつっこいくらいにいった。

あとで考えてみると、変わったことだった。

連続的に爆発音がひびき、私（鈴木）たちのいる民間ごうが、ゆれ、内部の土がくずれてきたの

七師団戦記

あゝ沖縄 <52>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

弾薬ならぬ食糧

決戦前に舌つづみ

コンサイス

四月十五日、山三四七四部隊第二大隊（平野大隊）は、全滅寸前の窮地にあった。

米軍は正午ごろ、平野大隊の各中隊陣地を突破した。大隊本部の右後方からは、米戦車四台、歩兵五人ほどが肉薄してきた。左後方には、二個中隊以上の米歩兵が陣地を占領、戦車を大隊の方にむけ、そのかげで、こちらの様子をさぐりはじめた。

沖縄戦二十二日の間

5月23日 奥山道郎大佐指揮の第三四四部隊、北中飛行場に第行進撃し、米軍機、施設を破壊、二十七日まで奇戦して、全員戦死

平野少佐は田中松太郎曹長を呼んだ。

「指揮班と本部とうろうしている負傷兵で、自分で歩ける者は、本部の軍生兵一人をつけ、日没後、新原伍長にいる右兵団の輸生隊へ後送せよ」

田中曹長は、決戦準備だなーと、通信紙に命令をメモしながら思った。

「…大隊砲は、野砲六発を、本夕、敵が撤収するときに撃ち全弾を、本部後方の米兵兵部隊と戦車が集結し、こちらを偵察しているところに撃ち込め。その後、大隊砲を破壊せよ」

いまや大隊は、前後左右を米軍にとりまかれている。平野少佐としては、軍司令部の命令が

「指揮班と本部とうろうしている負傷兵で、自分で歩ける者は、本部の軍生兵一人をつけ、日没後、新原伍長にいる右兵団の輸生隊へ後送せよ」

田中曹長は、決戦準備だなーと、通信紙に命令をメモしながら思った。

「…大隊砲は、野砲六発を、本夕、敵が撤収するときに撃ち全弾を、本部後方の米兵兵部隊と戦車が集結し、こちらを偵察しているところに撃ち込め。その後、大隊砲を破壊せよ」

どうあろうとも、生存者約五十人で、左後方の米軍に夜襲を決行する覚悟らしい。

しかし、田中曹長は、まだ一日くらいは、この陣地を確保できると考えた。いくら各中隊が沈黙しているとはいえ、全員が戦死してしまったわけではない。そう思った。絶望的な状態にあるが、生き抜く立ち場に立った覚悟をとった。

負傷者は後送させた。弾薬係には、重手榴弾、手リュウ弾十発は絶対確保するようにつげたくさん補充するように命じた。あす（十六日）以後の肉弾戦を予想しての準備である大隊砲は、日没後、司令部の位置までさげ、そこへ弾薬を運ぶように命じた。

さらに曹長は、寺岡軍曹（第七中隊の命令受領者）につぎの任務を命じた。

「夜間、中隊へ帰って命令を伝達したら、左後方の米軍陣地を偵察してきてくれ。陣地にはトラック二台で集積した荷物が見えるが、あれは、弾薬か糧秣（りょうまつ）か。それとも、あすから使用するつもりの新しい兵器なのかよく調査してきてくれ」

どんな窮地に追い込まれても戦う意思を捨てない。この根性は一軍人精神ともいっていたが、数々の不自由と手足、非人間的な生活一軍隊生活は、戦闘時の生活を基本としていたーによって育成され、きたえあげられたものだった。

むろん、寺岡軍曹も命令に従い行動し、午後十一時ごろ、田中曹長の前に新原兵長を連れて現われた。二人とも、ダンボールの箱を背負ってきたが、それを狭いこの内においた。

「曹長殿、これは弾薬や兵器の置場ではありません。衛生材料かとも思いますが、見てもらいます。こっちへ来てください」

迷惑そうな声で

「お前たち、やっかいなものを持ち込んだなあ。みんなあっちへ行ってくれ。ここの外へ出ろ」

と、兵隊たちを追い出した。曹長は、自分が命令した、その復命である。海軍ことも、そるロウソクの火を前に近づけた。

ダンボールに英文が印刷してある「Oレーション」と読めた。なんのことやら、わからない。見てゆくうちに「FOOD」（フード）とある。たべものらしいーと判断した。

さっそく箱を開いた。ちゃんと、一人分ずつに包装されて米兵の食事

米軍の流民知海岸陣地撤げ場＝米陸軍琉球司令部提供

だ。コーヒーがある。ビスケット、キャンデー、肉のかんづめ、さらに、ひかり輝くたばこ。

「おうと思い、一個いただいてきました。見てください」

目の前に置かれた、えたいの知れぬ箱に、田中曹長は、かすかな恐れを感じた。川口伍長は、時と共見かげたラクダのついたこの一個のショーウィンドーで。

たばこ「キャメル」や和用のわからない上等なたばこなどがはいっている。

不安は、喜びにかわり、平野少佐以下指揮班の将兵でわけて食べた。そのうまいことに、みんな、目をまるくしておどろく。田中曹長はうまさを味わいながら、新原で拾ったコンサイスを思い出し、見せなくてよかったと思った。

だが、それにしても、あれから五日間、よくぞ生きてきたものだ、と、万感胸に迫る感じだった。

× ×

米軍は、沖縄戦の緒方で、一大補給作戦を四月二日以来、昼夜兼行で行なっていた。特攻機・台風の襲撃をうけながら、上陸地点の新原知海岸には、一大桟橋（さんばし）を建設し、四月十六日までに五十七万七千トンの物量を陸揚げしていた。さらに、その物資を前地へ運ぶための道路建設や、巨大な航空燃料貯蔵所の建設にうきとりかかっていた。

（調査・山口部隊令部、筆本岡雅夫軍曹天下、本岡英子さん（社会部・月曜）

七師団戦記

あゝ沖縄 <53>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

岩にへばりつき

ゴウ内に集中攻撃の嵐

馬乗り攻撃

米軍は、陣地手前に食糧を置いたまま、夕刻、後方陣地へ退いて行った。平野大隊の夜襲予防としての行動だ。平野大隊は、あす(十二日)陣地を確保できたとしても、十七日以後の弾薬、食糧の補給はなずかしかった。各中隊は、それぞれ陣地補修をする一方、偵察兵を出して、特攻隊員が発見した米軍食糧を、各自の陣地へ運び込んだ。各中隊が、ここへきたときは、兵隊はそれぞれ百五十人ぐらいいたが、いまでは、各中隊とも三十人ぐらいに減っていた。

十五日二日の敵の猛襲で、堅い岩の地面が平均三尺ぐらいもけずりとられた。あたり一面岩のかけらを敷きつめたようだ。そのあちこちに、砲弾の破片、戦友の血と肉、軍服の布片、割れた鉄帽、こわれた兵器が散乱している。

陣地の山頂は、大きな岩山なので、戦死者を埋める穴は掘れない。その暇もなく、戦死体はハエのひらがるまま、放置されていた。

米軍は、平野大隊と、観測部隊の間に陣地を構えた。これは、大隊のきがる道や補給路を断ち切り、大隊を孤立させて全滅をはかる作戦であることは明白だ。

米軍は、田中曹長の推定どおり陣地に馬乗り攻撃をかけた。

「きのうまでは、米軍は、前方と左右両方面にしかいなかった。いまや、後方・側面方面にも、敵戦車が現われ、歩兵が陣地構築をはじめたのだから、あすは大隊本部陣地も、敵歩兵の馬乗り攻撃をうけるだろう。この城力所以外は、全部あきだ。敵砲弾が飛び込まぬよう厚さ二、三尺ほども、頭大からこぶし大の岩石を積みあげたのである。

田中曹長は、こう推定した。

米軍は、田中曹長の推定どおり陣地に馬乗り攻撃をかけた。陣地の上、出入り口に米兵がへばりつき、どう内を手りゅう弾、火炎放射器、機関銃で攻撃する(この攻撃を、日本軍は米軍の馬乗り攻撃と呼び、今後も戦記中にたびたび出てくるので、ご記憶ください)

平野大隊長以下将兵は、米軍のすきをうかがい、ピストルで、撃つのが精いっぱいの抵抗。山頂の監視口付近には、ただだんだん、機銃の銃口を監視口に集中している。二十人ぐらいの米兵が、八方からはって肉薄してくる。日本側は、穴から一人だけ頭を出せる大きさ。米軍は、そのまま、横に倒れた。

たちまち敵の歩兵は、入り口付近に走り寄り、あちこちにへばりついた。入り口からの攻撃が激しくなった。

田中曹長は、山頂の監視口で発煙弾を破ゃした。間にかくれ、どこから山頂に近て、彼我の戦死体を積みかさねた。西南方政撃の兵隊もいない。見守っている。

監視口のたて穴は、直径が一尺ぐらい。一人が、やっと頭を出せる大きさ。米軍は、そのまま、助けている。戦車の機銃口が火を吹くと、穴の人員もいなくなった。立て穴の岩が、だんだん血で赤く染まってゆく。

本田曹長は、下の入り口付近にがんばり、毛布のノレンに当たって落ちる敵の手りゅう弾を、ひろって投げかえしていた。

彼我の死体が、ふえていった。

敵の死体は、ふえていった。

入り口から五十尺ぐらい先に米軍の戦車がおり、歩兵の攻撃を助けている。戦車の機銃口が火を吹くと、穴の人員もいなくなった。立て穴の岩が、だんだん血で赤く染まってゆく。

本田曹長は、下の入り口付近に集中した。砲弾と迫撃砲弾が飛来しないのは、あたりに米兵がたくさんいるためだった。曹長は、眼と鼻に負傷しながらも、はって監視口の入り口に戻った。

日本軍のホラ穴陣地に馬乗り攻撃をかける米軍＝米海軍第五遊撃部隊提供

たちまち敵の歩兵は、入り口付近に走り寄り、あちこちにへばりついた。入り口からの攻撃が激しくなった。

田中曹長は、山頂の監視口で発煙弾を破ゃした。間にかくれ、どこから山頂に近て、彼我の戦死体を積みかさねた。西南方政撃の兵隊もいない。見守っている。

監視口のたて穴は、直径が一尺ぐらい。一人が、やっと頭を出せる大きさ。米軍は、そのまま、助けている。戦車の機銃口が火を吹くと、穴の人員もいなくなった。立て穴の岩が、だんだん血で赤く染まってゆく。

本田曹長は、下の入り口付近に集中した。砲弾と迫撃砲弾が飛来しないのは、あたりに米兵がたくさんいるためだった。曹長は、眼と鼻に負傷しながらも、はって監視口の入り口に戻った。

沖縄戦ざんの間

5月24日

米軍、首里周辺を攻撃。正午、那覇厚生に突入。東水号作戦(特攻九十八隻)で米軍艦艇撃沈破、損傷九。

訂正　山口師団司令部・故笹岡軍曹久矢曹長不入斗出身さん

(札幌市・月寒)